

博多祇園祭における飾り山笠の標題の歴史的研究 —— 山笠飾りに表れた朝鮮にたいする心性について —— (I)

黒 木 彬 文

Historical Studies Concerning the Titles of Decorated Floats
in the Hakata Gion Yamakasa Festival:
The Ethos toward Korea Implied by the Decorations the Floats Have Had
(I)

Morifumi Kuroki

要 旨

博多祇園山笠の飾り山笠において、17世紀から1945年までの間に、最も多く飾られたテーマは神功皇后の三韓征伐と豊臣秀吉（秀吉の家来の加藤清正をはじめとする武将たちを含む）の朝鮮征伐であった。そこには当時の祭の主体（主催者）が、神功皇后や秀吉の朝鮮への侵略に同調し称賛する心性が反映されていた、と思われる。そのような心性は、当時の博多福岡地域のひとびとを取り巻く社会的雰囲気とも関連していた。それをしめすふたつの歴史的事実（明治20年開催の福岡博物展覧会への出品物と櫛田神社に奉納された刀）について記している。

Keywords : 博多祇園山笠 Hakata Gion Yamakasa、飾り山笠 Decorated float、朝鮮への心性 Ethos toward Korea、神功皇后の三韓征伐 Conquest of three Korean states by the Empress Jingu、加藤清正の朝鮮征伐 Conquest of Korea by the warrior Kato Kiyomasa、朝鮮分捕り品の展示 Exhibited items plundered from Korea

はじめに

博多（福岡市）には古くからの二つの祭りがある。五月のはかたどんたく港祭り（はかたどんたく）と夏七月の博多祇園山笠祭（博多山笠）である。

博多山笠は1433年の博多津櫛田神社の疫病よけを願う祭事（『九州軍記』）に起源するといわれる夏祭りであり、毎年七月一日から十五日にかけて開催される。祭の主体（山笠を組織運営する「流れ」と呼ばれるいくつかの町の集まり、および「流れ」の連絡調整機関である博多山笠振興会など、祭の主催者をいう）がいう「豪華絢爛にして勇壮な」山笠には多数の観光客が集まり、いまや五月の博多どんたくと並んで福岡を代表する全国的祭りとして有名である。

博多祇園山笠祭りは櫛田神社の特殊祭事であり（大日本神祇会福岡県支部編『復刻 福岡県神社誌（上巻）』

（防長史料出版会、昭和63年）58頁）、宗教的には櫛田神社の三祭神（大幡主大神、天照大神、素戔鳴命）のひとつ、素戔鳴命への氏子の奉納の神事である。しかし、今日では博多山笠は、櫛田神社の祭事のほかに博多福岡地区の地域活性化と観光客勧誘の性格も合わせもっており、ここから祭りのあり方をめぐり、伝統重視か、商業性重視かの対立も生まれることになる。

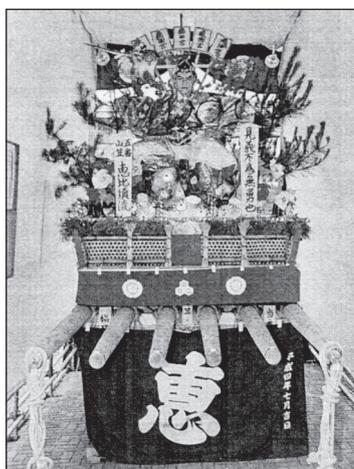
(1) 飾り山笠の標題

博多山笠の「豪華絢爛」な面を示すのが博多区と福岡区十八ヶ所（2011年の場合）に飾られる飾り山笠であり、「勇壮」な面を示すのが祭り最終日の7月15日の櫛田入りを競う昇き山タイムレースである。

祭りの「豪華絢爛」な面を示す飾りは、古くから奇数組の「さし山」（「修羅」）と偶数組の「堂山」（「鬘、か

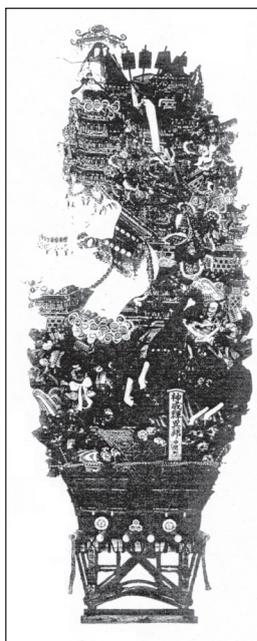
ずら」に分けられた(落石栄吉『博多祇園山笠史談』(博多祇園山笠振興会、昭和36年)164頁)。今日、「修羅」は「武者もの」とも言われ、合戦やそこで活躍する勇ましい武者を主人公にしたダイナミックな構図の勇壮な飾りである。一方「かずら」は「静かもの」ともいわれ、神話や伝説、説話の女性、歴史上の孝女などを主人公とした優美な飾りである。

山笠には昇き山(かきやま)と飾り山がある。昇き山とは祭最終日の7月15日早朝にタイムレースをする「流れ」が立てる山であり、飾り山とは祭の期間中、街角と櫛田神社に立てられる華麗な人形で飾られた十メートル前後の山である。

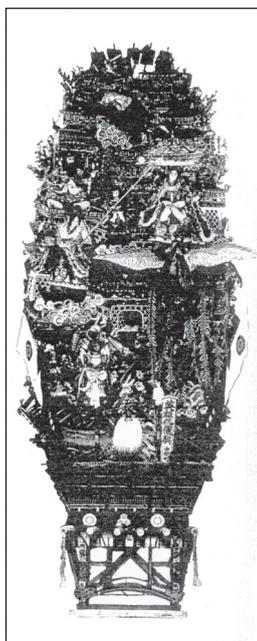


写真① 昇き山笠 (1995年・平成7年)

博多山笠振興会『博多祇園山笠』(平成7年)より



表「神威輝異邦」



見送り「英雄仇儼契」

写真② 飾り山笠 (1928年・昭和3年)

中西正則編著『博多山笠記録巻の壺』より

2011年の山笠では、昇き山は7つ(一番・西流れ、二番・千代流れ、三番・恵比寿流れ、四番・土居流れ、五番・大黒流れ、六番・東流れ、七番・中洲流れ)であり、飾り山は十一カ所(八番から十七番及び番外の櫛田神社)に立てられた。

飾り山は前を「表(おもて)」と呼ばれ、後を「見送り(みおくり)」と呼ばれている。また飾りには、歴史上や神話、伝説上の人物が成し遂げた英雄的行為や輝かしい事績が取り上げられ、あるいはお伽噺の主人公が發揮する鬼や邪を退治する勇敢な行為や出来事が取り上げられる。

それらの共感、称賛すべき人物や出来事をテーマにした物語を簡潔な漢語句で表現したのが「標題」である。例えば豊臣秀吉とその家来たちの「朝鮮征伐」とか神功皇后の「三韓征伐」のようにである。この「標題」は飾り山笠の「表」と「見送り」のそれぞれにつけられ、人形飾りがなにを物語っているか、を見る者に伝えている。飾りを見るひとびとは、飾りを見、「標題」を読んで、飾りの物語を理解するのである。近年は理解を助けるために、飾り山笠の脇に「由来書き」や「解説書き」が置かれており、見るひとびとの理解を助けている。標題名は毎年、各「流れ」毎に、「流れ」の代表者と人形師が相談して決定する、といわれている。祭の主体は、自らが共感し称賛するに値すると考える人物や出来事を標題に採用する、と思われるので、採択された標題には、祭の主体がもっている歴史への心性や歴史認識が反映されているとみてよいであろう。

(2) 標題の例示

ここに、時代が異なる四時期の標題を例示してみると以下のとおりである。なお、標題にふっている数字は整理するためであり、山笠祭の「流れ」に割り振られた「番号」ではない。

- [1] 櫛田神社の『山笠記録』に残されている一番古い1669(寛文9)年の標題は、つぎのとおりであった。
1・衣笠合戦、2・義経鈴の御崎にて貝取、3・白川合戦、4・大職冠、5・摩屋合戦、6・上瑠璃。この時期の標題はほとんどが「合戦」ものである。
- [2] 明治維新直前の1867(慶応3)年の標題は、つぎのとおりである。
①七勇揮鎗誉、②二十四孝、③英雄風流捷、④邯鄲一夢榮、⑤海城宝剣奏、⑥神刀二銘劍。
- [3] アジア太平洋戦争の戦後初の1948(昭和23)年の標題は、次のとおりである。
①復興博多誉、②桃太郎、③源平盛衰記、④日出鯛、⑤平和之光、この年の子供山笠は①神徳如大海、②

怪力双勇鑑であった。

- [4] 2011 (平成 23) 年の標題は、つぎのようであった。
- ①昇き山・長政博多入、②昇き山・怪童金太郎、天下布武誉、見送り・足柄怪童勲、③昇き山・鐵槌舞春風、④昇き山・曾我富士誉、⑤昇き山・常行一直心、⑥昇き山・武士向月祈命運、天下繚乱戦国陣、見送り・山笠起源由来縁、⑦昇き山・楠公湊川の奮戦、攻防千早城、見送り・老公妙案救天下、⑧京一条戻橋、見送り・秀吉賤ヶ岳合戦、⑨疾風迅雷六文戦、見送り・アニメ美食屋トリコ、⑩博多乃豪商、見送り・天璋院篤姫、⑪季長元寇之武勲、見送り・尊氏多々良浜誉、⑫一寸法師話、見送り・アニメ名探偵コナン、⑬鷹昇快進撃、見送り・奮戦箴の梅、⑭大阪夏の陣、見送り・ワンピース、⑮流星光底逸長蛇、見送り・武勲桃太郎、⑯戦国の女江、見送り・ドラえもん、⑰怪力相撲日田殿、見送り・勇者ライオンズ、番外 智将疾風関ヶ原、見送り・神話天の岩戸譚。このようにアジア太平洋戦争後の今日では、テレビや映画で子供たちに人気のあるアニメ漫画の主人公などが標題に取り上げられるようになった。

(3) 問題の設定

管見のかぎり、山笠飾りの記録をみることができた1669年から1945年までの間で、数多く取り上げられた標題はつぎのようなものである。すなわち、(1) 神功皇后の三韓征伐にかかわるもの、(2-1) 豊臣秀吉(秀吉家臣の武将も含む)の朝鮮征伐にかかわるもの、(2-2) 豊臣秀吉の朝鮮征伐以外での秀吉の武勇・栄耀栄華にかかわるもの、(3-1) 加藤清正の朝鮮征伐時の虎退治にかかわるもの、(3-2) 加藤清正の朝鮮征伐時以外での武勇にかかわるもの、(4-1) 源義経にかかわるもの、(4-2) 源義経の活躍した合戦にかかわるもの、(5) 牛若丸にかかわるもの、(6) 武蔵坊弁慶にかかわるものなどである。

ところがアジア太平洋戦争の戦後になると、飾りの標題は大きく変容する。すなわち、神功皇后「三韓征伐」は数件に激減し、それに代わって登場するのが豊臣秀吉の朝鮮征伐以外の武勇や栄耀栄華(「復興博多誉」などに見られる秀吉の博多街作りに果たした役割への称賛)や義経、弁慶の武勇や金太郎、桃太郎などお伽噺の主人公たちである。

このように飾り山笠に採択される標題は、1945年を境に歴史的に大きく変容した。

そこで、この論文の課題をつぎの四点としたい。

1. 1945年以前における、飾り山笠の標題と年次を調

査し件数を明らかにすること。また明治維新以降の近代における事変、戦争と飾り山笠の標題との関連性を検討すること。

2. 1945年以降今日までの飾り山笠の標題と年次を調査しその件数を明らかにすること。そして山笠飾りのテーマにかかわる標題は、1945年を境にどのような変容を示したのか、その変容の要因はなにか、を検討すること。
3. 1945年以前において多く飾られた標題(神功皇后「三韓征伐」、豊臣秀吉とその家来たちの「朝鮮征伐」など)は、いかなる主体の歴史への心性を映し出しているのか、また1945年以降はその心性はどのような変容を示しているのか、を推定すること。
4. 飾り山笠の飾りは、それを見物するひとびとに朝鮮についてどのような心性を与えたのか、を検討すること。

以上四点のうち、本稿で取り上げるのは1と3であり、2と4は次号でのべることとする。

祭りの主体は、このような神話上の女帝や歴史上の人物が揮った武威にもとづく国威や武勇を、尚武の「勲(いさお)」あるいは「誉(ほまれ)」と評価し、人形飾りに形象化してきた。なぜ町人の祭をいわれる山笠に武威にもとづく国威や武勇を形象化した人形が、歴史的に数多く飾られてきたのであろうか。

それらの人物や出来事は、飾り山笠を見物する庶民(地元のひとは「山見をする」という)にとっては、子供の頃から親や学校で読み聴かされてきた馴染みのものであった。あったと過去形になるのは、現在の子供たちはもちろん、現在70歳以下の大人も含めて、1945年以降の戦後教育で神話伝説の学校教育を受けていない世代は、神話伝説に馴染みが余りないからである。そのため近年は、標題の詳しい解説板や解説書きが飾り山笠の脇に置かれるようになった。

山見をする庶民は、飾りや飾りの標題をみても飾りの物語が分からないときには、この説明書きを読んで、豪華絢爛な飾り人形たちが物語る過去の歴史に思いを馳せ、飾り人形たちが物語るひと・ものへの心性や歴史認識を理解しようとする。しかし、それは同時に山笠飾りのもつ心性、歴史認識を見るひとが一旦受け入れることでもある。

このようにして、山笠飾りが物語る心性や歴史認識は、それを見るひとびとの心性なり歴史認識に無意識のうちに影響を与えていくと思われる。それは例えばひとが映画をみるときに、その映画が物語る、ひとやものへの心性や歴史認識に感情移入し、共感する心理作用と同じであろう。

同じ標題の飾りが年を替えて何回もくり返し飾られる

ときには、ひとびとに与える影響は大きくなっていくであろう。とりわけ、飾られている物語にたいする心性や歴史認識が形成されていない、いわばそれが白紙に近い幼年期や少年少女期の子供たちの心性や歴史認識に与える影響は、大きいと思われる。見入る時間が短い山見物は、見入る時間が長い映画見のときほど、大きな影響を与えることはないであろう。しかし、現在のような、映画・TVのような映像メディアがなかった時代にあっては、例えば1950年代以前の時代においては、たしかに映画はすでにあったとしても観る機会が少なかった時代においては、金箔、銀箔がきらめき色彩豊かな躍動感溢れる人形たちが織りなす物語にこどもたちは引き込まれ、飾りのもつ歴史的心性や歴史認識に強い影響を受けた、と思われる。

1-1. 1731~1930、1935年の時期において、多く採択された標題

1731~1930、1935年の江戸時代214年間の標題は、落石栄吉『博多祇園山笠史談』（博多山笠振興会、昭和36年）を典拠にした。しかしこの本記載の標題名だけからは飾られているテーマの確定ができないので、『祇園祭禮 山笠歳代記全（延宝八申歳~慶応三年）』（福岡市立総合図書館蔵）を参照してテーマを確定した。この『祇園祭禮 山笠歳代記全』は写本であるが、飾られた人形の人物名が記されているので、テーマを検討するのに便利である。また上記落石本には1931~1934年と1936~1944年の山笠標題が記載されていないので、新聞「九州日報」記事で判明した標題は（10）に記している。

以下の標題の表記順序は、標題の飾りが飾られた西暦年（「年」略）、丸かっこに和暦、つぎに表（おもて）の標題、ついで見送りの標題、とした。

なお、表（おもて）の標題は、標題名だけ記し、見送りの標題には「見送り」と付記した。標題の件数では、おもて（表）、見送りにつき、それぞれを1件として計上した。またその標題が飾られた年については、西暦年の年を省略し括弧内に元号を記入し、標題名の判読不能の文字は*で示した。

(1) 神功皇后の三韓征伐にかかわる標題（標題数 39件）

1731（享保16）三韓征伐、1750（寛延3）三韓帰陣、1755（宝暦5）磯良神出現、1756（宝暦6）三韓御退治、1766（明和3）牛兜義儀、1797（寛政9）征韓凱旋、1803（享和3）韓征御利運禪、1807（文化4）異域降服基、1811（文化8）神軍双珠徳、1816（文化13）天兵降弊瑞、1820（文政3）海神献珠舞、（阿磯羅麻呂、音姫

姫命）、1821（文政4）神井染鎧祥（神功皇后、武内宿禰）、1821（文政4）皇威吞狄、1830（文政13）神后凱陣賽、1830（天保1）神后凱陣賽、1832（天保3）三韓降伏貢、1833（天保4）海外降伏始、1835（天保6）征韓臣伏貢、1835（天保6）北伐微会場、1836（天保7）香椎神遊、1837（天保8）魚隊投*観、1840（天保11）岡湊御船祭、1842（天保13）三韓退治、1844（弘化元年）聚楽朝鮮貢、1846（弘化3）征韓魚鳥瑞、1848（嘉永1）青兜征韓初、1848（嘉永1）征韓首途儀、1851（嘉永4）海外降伏始、1851（嘉永4）三韓退治、1858（安政5）征韓捷書奉進、1864（元治1）三韓退治、1866（慶応2）三韓降伐勲、1885（明治18）聖后招福琴（神功皇后、武内宿禰）、1900（明治33）神国武威基、1924（大正13）苦節之奮戦（見送り・武徳照異国）、1924（大正13）国威輝四海（見送り・西遊記）、1928（昭和3）神威輝異邦（見送り・英雄仇儷契）、1935（昭和10）皇威異域輝（見送り・菊水勤王之鑑）、1935（昭和10）皇威輝四表（見送り・三国義誼）。

39件の〈年次別内訳〉

1731・1、1750・1、1755・1、1756・1、1766・1、1797・1、1803・1、1807・1、1811・1、1816・1、1820・1、1821・2、1830・2、1832・1、1833・1、1835・2、1836・1、1837・1、1840・1、1842・1、1844・1、1846・1、1848・2、1851・2、1858・1、1864・1、1866・1、1885・1、1900・1、1924・2、1928・1、1935・2。

この標題は1730年代以降1935年まで、ほぼまんべんなく採択されているが、1830年代から幕末期に集中している。

神功皇后とは『古事記』、『日本書紀』に見えるいわゆる三韓征伐の主人公。記、紀によれば皇后は名をオキナガタラシヒメといい、父は開化天皇の曾孫。仲哀天皇の后として熊襲（くまそ）を討つために天皇と北九州におもむいたが、天皇が筑紫（つくし）で急死すると、武内宿弥（たけうちすくね）とはかって、妊娠中にもかかわらず、海を渡って新羅の都城に攻め入り、国王を降伏させ、その証拠として岩壁に弓先で「高麗は大和の狗」と彫り込んだ。そして筑紫に帰って応神天皇を生んだ。これによって百済と高句麗も初めて帰服したが、皇后はやがて大和に帰って応神天皇を皇太子に立て、約70年間みずから政治をとって269年に死んだ、ということになっている。いうまでもなく記・紀のこの頃の記事は史実性に乏しく、この物語も伝説の域を出ないものであった。

1731年~1818年までが13件、1830~1932年までは26件と倍増しており、1830年代以降1868年の明治維新までに急増している。この急増は、1824年のイギリス捕鯨船員の水戸藩大津浜への上陸事件や同年のイギリス

捕鯨船員の薩摩宝島への上陸略奪事件が起こっているの
で、これら欧米列強の日本への侵出への対外危機感の醸
成と関係しているものと思われる。またそのような対外
危機感が国学の広がりを促し、日本の国威発揚のシンボル
である神功皇后の登場をもたらしたものと思われる。

(2-1) 豊臣秀吉(秀吉家臣の武将も含む)の朝鮮征 伐にかかわる標題(標題数 37件)

1792(寛政4)朝鮮都城魁(小西行長)、1801(享和
元年)征韓英武勲(加藤清正)、1802(享和2)韓軍威
服聘(沈惟敬、増田右衛門尉長盛)、1812(文化9)朝
鮮先鋒船(加藤清正)、1815(文化12)擒王班師功(加
藤清正)、1815(文化12)猛将花下遊、1815(文化12)
小西神速魁、1824(文政7)朝鮮手始高名(加藤清正)、
1825(文政8)朝鮮水軍誉(明将陳琳璘、涌く坂中啓太
夫)、1829(文政12)唐使饗応宴、1830(天保1)和韓為
成之策、1831(天保2)久軍帰計功、1832(天保3)征
韓援兵航、1832(天保3)武征生擒誉、1837(天保8)
良将慈誉、1838(天保9)朝鮮烏山合戦、1839(天保
10)晋城鉄標識、1840(天保11)朝鮮向舟競、1840(天
保11)朝鮮先駆功、1841(天保12)霊夢感応瑞、1841
天保12)蔚山群雄会、1845(弘化2)釜山水戦捷、1845
(弘化2)拳兜征韓初、1850(嘉永3)蔚山還救勇、1852
(嘉永5)武徳生擒誉、1858(安政5)征韓捷書進、1859
(安政6)釜山浦戦伐、1863(文久3)遥望征艦態、1888
(明治21)征韓武略績(加藤主計頭清正・沈惟敬)、1888
扶桑千古誉、1894(明治27)海外武勇勲(後藤又兵衛・
黒田長政馬・モクソカン、見送りに小西撰津守行長・朝
鮮国王官女)、1895(明治28)外政今古誉(朝鮮蔚山
城・飯田角兵衛馬・朝鮮人二人奮戦、1895征韓奮戦誉
(大明李益喬馬・栗山備後馬、見送りに斎藤立本・女真
国猛将)、1927(昭和2)瓢威輝四海、1935(昭和10)
見送りに武勇振三韓。括弧内は飾り人形の説明である。
37件の<年次別内訳>

1792・1、1801・1、1802・1、1812・1、1815・3、1824・
1、1825・1、1829・1、1830・1、1831・1、1832・2、
1837・1、1838・1、1839・1、1840・2、1841・2、
1845・2、1850・1、1852・1、1858・1、1859・1、
1863・1、1888・2、1894・2、1895・3、1927・1、
1935・1。

標題から想像すると、飾りの主役になっているのは秀
吉ではなく、実際に朝鮮出兵して戦争を仕掛けたかれの
家来たち(小西行長、加藤清正、黒田長政、後藤又兵衛
など)である。しかし祭の主体は、かれらに朝鮮征伐を
命じたのは太閤秀吉であることをよく認識していた。な
お、1894年の標題「海外武勇勲」で飾られた「モクソ

カン」とは、小瀬甫庵が著した『太閤記』の文禄の役を
あつかった場面に出てくる「木曾判官」(もくそはんが
ん)という朝鮮の武将がいる。近松門左衛門はこの「木
曾判官」を原型にして浄瑠璃『本朝三国志』のなかに
「牧司判官」(もくそはんがん)を登場させている。『本
朝三国志』(1719年・享保4年の初演)の話は、真柴久
吉(豊臣秀吉)がかつて日本に朝貢していた高麗国を家
来の加藤正清(加藤清正)と小西弥十郎(小西行長)に
征伐させ、高麗国の遼東王を捕虜とし、助命のかわりに
日本に従属させ、未来永劫に朝貢を強要した、というも
のである(須田努「江戸時代 民衆の朝鮮・朝鮮人観」
『思想』No.1029、2010年1月、p.157参照)。

(2-2) 豊臣秀吉の朝鮮征伐以外での秀吉の武勇・栄 華にかかわる標題(標題数 13件)

1839(天保10)一瓢延夢起、1844(弘化元年)豊公
観花栄、1848(嘉永1)姉川力戦誉、1852(嘉永5)聚
楽恭敬棒、1859(安政6)高松漢涵水、1864(元治1)
豊公遺糧策、1867(慶応3)七勇揮鎗誉、1872(明治5)
豊公之栄華、1872(明治5)蛟竜騰天機(羽柴秀吉四王
天但馬守(加藤虎之助))、1885(明治18)三国武勇誉、
1893(明治26)英雄希世勲(木下秀吉・坂井右近・磯
野丹波守馬)、1928(昭和3)豊公武勲誉、1935(昭和
10)豊公初陣勲。

13件の<年次別内訳>

1839・1、1844・1、1848・1、1852・1、1859・1、1864・
1、1867・1、1872・2、1885・1、1893・1、1928・
1、1935・1。

(3-1) 加藤清正の朝鮮征伐時の虎退治にかかわる標 題(標題数 3件)

1868(慶応4)整暇溱搏獸遊、1904(明治37)三韓退
治(清正之勇拳=大虎退治、これは虎退治清正像の初出
と言われている)、1928(昭和3)擒虎争名槍(見送り・
驍勇驚敵将)。

3件の<年次別件数>

1868・1、1904(明治37)・1、1928(昭和3)・1

(3-2) 加藤清正の朝鮮征伐時以外での武勇にかかわ る標題(標題数 2件)

1893見送り・(老鰻夫・木村又蔵・猫又・加藤清正)、
1920(大正9)清正四国征伐。

2件の<年次別件数>

1893・1、1920・1。

(4-1) 源義経にかかわる標題(義経が登場人物とし て飾られているもの。一谷合戦、鴨越など義経、弁慶

が登場すると思われる標題は直接のテーマは合戦であり、義経、弁慶ではないので取り上げていない（**標題数 13件**）

1669（寛文9）義経鈴の御崎にて貝取、1695（元禄8）頼朝義経対面、1714（正徳4）義経弓流、1729（享保14）義経奥州首途、1747（延享4）義経御所守護、1749（寛延2）義経三草山越、1752（宝暦2）大物*軍評定、1832（天保3）海城宝剣奏、1841（天保12）義経弓流、1862（文久2）凌瀾魁戦功、1862（文久2）驍将捷飛将勇、1889（明治22）檀溪飛渡将、1910（明治43）義経千本桜。

13件の<年次別件数>

1669・1、1695・1、1714・1、1729・1、1747・1、1749・1、1752・1、1832・1、1841・1、1862・2、1889・1、1910・1。

(4-2) 源義経の活躍した合戦にかかわる標題（標題数 28件）

1624（寛永1）一谷鶴越、1626（寛永3）赤坂城軍、1691（元禄4）一谷合戦、1694（元禄7）八島合戦、1695（元禄8）鶴越、1699（元禄12）堀河夜討、1704（宝永元）一谷鶴越、1707（享和2）進退応機船、1709（宝永6）一谷門出軍、1712（正徳2）八島、1713（正徳3）住吉合戦、1714（正徳4）堀河夜討、1716（正徳6）一谷坂落、1726（享保11）須磨浦合戦、1733（享保18）八島軍、1735（享保20）一谷合戦、1738（元文3）壇浦合戦、1744（延享元）一谷出軍、1748（延享5）壇浦合戦、1754（宝暦4）壇浦首途軍、1758（宝暦8）一谷坂落、1769（明和6）一谷合戦、1786（天明6）壇浦競勇、1810（文化7）一谷搦手魁、1825（文政8）一谷追討、1826（文政9）源家復古之功、1826（文政9）殊遇駿馬賜、1832（天保3）海城宝剣奏。

28件の<年次別件数>

1624・1、1626・1、1691・1、1694・1、1695・1、1699・1、1704・1、1707・1、1709・1、1712・1、1713・1、1714・1、1716・1、1726・1、1733・1、1735・1、1738・1、1744・1、1748・1、1754・1、1758・1、1769・1、1786・1、1810・1、1825・1、1826・2、1832・1。

(5) 牛若丸にかかわる標題（標題数 12件）

1680（延宝8）鞍馬天狗、1682（天和2）源平花見瑞、1688（元禄元）船弁慶、1723（享保8）牛若虎丸、1734（享保19）鞍馬兵法伝、1740（元文5）牛若兵衛、1744（延享1）牛若英勇、1745（延享2）牛若英勇、1746（延享3）牛若奥州下、1819（文政2）五条橋、1855（安政2）鞍馬天狗、1910（明治43）牛若丸。

12件の<年次別件数>

1680・1、1682・1、1688・1、1723・1、1734・1、1740・1、1744・1、1745・1、1746・1、1819・1、1855・1、1910・1。

(6) 武蔵坊弁慶にかかわる標題（標題数 11件）

1688（貞享5）弁慶、1688（元禄元年）船弁慶、1692（元禄5）土佐坊正尊、1707（宝永4）橋弁慶、1712（正徳2）船弁慶、1714（正徳4）弁慶、1714（正徳4）弁慶勸進帳、1772（安永元年）武蔵坊軍配、1855（安政2）安宅臣義功、1860（万延1）勇刀扛鐘誉、1864（元治1）難波津之梅。

11件の<年次別件数>

1688・2、1692・1、1707・1、1712・1、1714・2、1772・1、1855・1、1860・1、1864・1。

つぎの(7)～(10)については各年の標題を全て記していく。

(7) 壬午事変・甲申事変から日清戦争以前（1882 - 1893年）までの時期の年次別標題（下線は朝鮮にかかわる標題）

1882（明治15）の標題は落石本（『博多祇園山笠史談』昭和36刊）には記載されていない。

1883（明治16）；勇義貫石誉、瑤台獅子戯、司馬温公遊、平将盛武基、浦嶋龍宮遊、单身浦默誉。

1884（明治17）；天孫降臨導、単騎檀溪勲、漢家起業基、二十四孝、龍窟神女艶、五字題詠楽。

1885（明治18）；聖后招福琴（神功皇后、武内宿禰）、花戦舞蝶媒、宝島出現起、錦囊三謀議功、三国武勇誉、亭行舞蝶宴。

1886（明治19）；祇園栄花墓、英雄夢誉雪喜、石清水、月宮競玉功、神人共震起、(5番山、記載無し)。

1887（明治20）；国土神護囚、漢家創業祥、太宰靈獸蹴誉、獅子牡丹戯、驍騎涉湖誉、至徳伏龍勇。

1888（明治21）；征韓武略績、威稜神社景、清風攘禍、扶桑千古誉、日勢挫韓軍（おもて（表）に人形二人・陸軍隊長、1888見送り・陸軍兵隊数人・訓練の処・ラッパ吹三人）、1888見送り・吉村吉衛門・朝鮮人、軍人人形飾り始め）。

1889（明治22）；智勇南都誉、檀溪飛渡将、朝鮮猛征勇、石橋戦、北望帰郷懐、英傑救妃勲。

1890（明治23）；英主断石跡、霊児宿胎瑞、元徳養老瑞、五師顕龍験、仙招龍術、賢人師涓狩獵護。

1891（明治24）；勇鶯破徐州、轅門射戦勲、神遊授福瑞、七福授宝楽、英雄水滸誉、英傑捕獲勲。

1892（明治25）；神仙狎龍遊、少年文覚宝之山、栄陽排困謀、睡眠見紅日、英雄誉廻鳥、朱紫國偉業。

1893（明治26）；単騎遠征誉、群侠結水滸、英雄希世勲、瑤池瓊漿楽、海神棒釣誉、玉の井。

1888年の朝鮮との軍事紛争にかかわると思われる標題が4件あるが、この年に飾られた背景は不明である。

(8) 1894年、1895年、1896年の日清戦争期の標題（下線は朝鮮、清国にかかわる標題）

1894（明治27）朝敵摧伏誉、1894（明治27）清心洗耳逸民誉、1894（明治27）西遊記、1894（明治27）清義千載惑、1894（明治27）藤微栄世基、1894（明治27）海外武勇勲（後藤又兵衛・黒田長政馬・モクソカン）、見送り・小西撰津守行長・朝鮮国王官女。

1895（明治28）義経腰越帳、1895（明治28）外政今古誉（朝鮮蔚山城・飯田角兵衛馬・朝鮮人二人奮戦）、見送り・清国趙北嘴支那人馬・樋口大尉抱孩児進、1895征韓奮戦誉（大明李益喬馬・栗山備後馬）、見送り・斎藤立本・女真国猛将、1895菅聖報国勲（菅公・白牛・白太夫）、見送り・天神・童子・舜準禅師、<おもて（表）の額に天拝山、見送りの額に神徳感唐衲、また神徳輝異域>、1895源家鎮琉球（北星翁・鶴・源舞天丸・龍嚙雲）、見送り・麗人・鶯・熊・鎮西八郎為朝、1895国威輝四表（快刀陸軍隊長 屠藍虎・蛮民洛天恩・陸軍隊長馬）、見送り・靈鷹蹴黄龍・豚奴仰旭光。

1896（明治29）神国之光輝（八幡宮鳩・劉副亨馬・少式景資馬）、見送り・賊船数艘・河野通有・敵将忽敦艦・草野七郎船、1896英雄退妖鬼（茨木童子・渡辺源吾綱）、見送り・源頼光・坂田金時・官女、1896（明治29）仁義祥福基（金伽羅童子・不動明王・祐天小僧）、見送り・悪源太義平・小松内府重盛馬）、1896西遊記（鳳凰・唐太宗皇帝・皇后）、見送り・悪魔龍・沙悟浄・孫悟空、1896鴛鴦千歳之契（源頼信朝臣・恋想官女修理命婦・鶴）、見送り・安部宗任於厨川柵・藤原季俊馬被追討、1896天孫稜威治国劍（彦火瓊々*命・天津久米命・天忍日命・某命・三種神器・天鈿女命・猿田彦大神）、見送り・童女・日本武尊・熊襲。

以上の日清戦争期の標題のうち、下線は秀吉の朝鮮征伐、日本軍の清国攻撃、日本軍の朝鮮攻撃を表す標題であり、日清戦争期に多く飾られていることが分かる。このことは、秀吉の朝鮮征伐の標題が、日清戦争における軍人鼓舞、戦争支持、朝鮮・清国への優越・蔑視（1895年「豚奴仰旭光」）の心性と結びついていたことを示している。

櫛田神社『山笠記』をみると、明治初年から日清戦争までには中国の三国志を標題（劉備、関羽、孔明）にしたものがかなりある。

(9) 1904年、1905年の日露戦争期（1903年もふくむ）の標題（下線は朝鮮に関わる標題）

1903（明治36）征韓武勇誉、1903（明治36）皇軍東征

誉、1903（明治36）一矢雲上鎮、1903（明治36）聖代勤業旺盛、1903（明治36）巖島、1903（明治36）皇軍東征誉。

1904（明治37）三韓退治、見送り・清正之雄拳。

1904（明治37）年は戦争のため山笠は立てられなかったが、櫛田神社の据山のみが飾られた。それはおもて（表）が「三韓退治」、「見送り」が加藤清正が大虎を仕とめている勇壮な「清正之雄拳」で戦時の決意を表していた。同年の福岡日日新聞（7月26日）は敵国降伏、出征軍人の武運を祈る人びとが櫛田神社に日夜参拝し境内を埋め尽くした、と報じた。加藤清正の虎退治の標題が日清戦争のときではなく、日露戦争開戦の年に初めて登場するのは興味深い。

1905（明治38）児島高德、1905（明治38）元寇記念碑・日本海大海戦（見送り）、1905（明治38）蘇我入鹿誅討、1905（明治38）古譚凱旋誉（御伽嘶桃太郎鬼ヶ島征伐）、1905（明治38）金鶏の弓・西遊記（見送り）、1905（明治38）本朝角觥の濫觴。

このような日露戦争期の標題のうち、1904年の標題「三韓退治」・見送り「清正之雄拳」はおもて（表）の飾りは<神功皇后の三韓征伐>、見送りの飾りが<加藤清正の虎退治>であった。虎は朝鮮を代表する動物であり、朝鮮の国と民族を表すシンボルである。このおもて（表）と見送りのふたつの飾りは一体となって朝鮮侵略を肯定支持していたのであり、おりからの日露戦争への戦意を昂揚していた。

(10) 1931～45年のアジア太平洋戦争期の年次別標題（下線は朝鮮、中国にかかわる標題）

1931（昭和6）；「博多山笠、飾り3本、昇き3本」の記事、写真はあるが標題記載なし（「九州日報」7月9日）。

1932（昭和7）；一番山笠（下東町）、おもて（表）「菊光武威輝」（菊池武時が櫛田神社前で大蛇を射殺した武威）、見送り「神鏡照断妖怪」（此花咲くや姫から後醍醐天皇に伝わり、その天皇が菊池武光に賜った花形の神鏡が――）（以上、「山笠巡礼、一」「九州日報」7月10日）。三番山笠（片土居町）、表「里見武勇誉」、見送り「船弁慶」（以上、「山笠巡礼、二」「九州日報」7月12日）。四番山笠（川端町）、おもて（表）「大坂城夏之陣」、見送り「北條三鱗」（以上、「九州日報」「山笠巡礼、三」7月13日）。五番山笠（下小山町）、おもて（表）「誠忠安社稷」（皇極天皇、大兄皇子中臣鎌足と謀り、入鹿を誅し給う）、見送り「妹背山婦女庭談」、六番山笠（上西町）、おもて（表）「頼光断邪魔」、見送り「軀絵奮剛勇」（木曾義仲の妻巴御前）（以上、「九州日報」7月14日）。1933（昭和8）；一番山笠（下堅町）、おもて（表）「源平盛衰記」、見送り「和訓水滸伝」。二番山笠（上一番山笠

新川端町) おもて(表)「順逆千古鑑」、見送り「威武敵三軍」。三番山笠(下網町)、おもて(表)「真田武門鑑」、見送り「義勇孝子鑑」、四番山笠(金屋小路)、おもて(表)「剛勇寒敵膽」、見送り「神威授霊夢」。五番山笠(蔵本町)、おもて(表)「神護武勇誉」、見送り「富国俱栄民」。六番山笠(上呉服町)、おもて(表)「英気発捕渠魁」、見送り「春宵夢悸傾国」(以上、「九州日報」7月10日)。

1934(昭和9)：一番山笠(浜小路)、おもて(表)「御所のお庭」、見送り「満州事変」。二番山笠(対馬小路)、おもて(表)「堀河夜討」、見送り「四国征伐」。三番山笠(御供所町)は中止。四番山笠(上小山町)、おもて(表)「太閤記本能寺」、見送り「蒙古来襲」。五番山笠(芥山町)、おもて(表)「壱岐の蒙古」、見送り「八犬伝」。なお、東流れ(九ヶ町)のうち五ヶ町は非常時につき山笠行事を中止することを申し合わせ、五ヶ町のうち御供所町はその費用から百円を国防献金として福岡市役所兵事課に寄付した(以上、「九州日報」7月10日)。

1935(昭和10)：皇威輝異域、見送り・菊水勤王之鑑(上鑑町)。勇士救難之勲、見送り・国家隆昌之基(鏡町)。豊公初陣勲、見送り・武勇振三韓(下市小路)。登鯉朝日勢、見送り・登鯉朝日勢(上土居町)。皇威輝四表、見送り・三国義誼誉(網場町)。国威輝乾坤、見送り・国威輝乾坤(万行寺前町)。

1936(昭和11)の山笠記事はなし。翌37年7月1日の記事に「山笠復興の声に感慨も新たに昨日いよいよ幕を開けた」とあるので、1936年は山笠は挙行されなかったと思われる。「福岡日日新聞」(6月14日)に「三百五十年前、灰燼の博多を救った豊太閤の大号令、農業本位から商工業へ転向、見よ彼の大経綸の跡」の見出しで博多復興を命じた秀吉の八ヶ条の触書を紹介している。秀吉を博多復興や博多の商工業振興の英雄として、評価している。この秀吉評価は、アジア太平洋戦争後の戦後から現在までの、祭の主体の秀吉像の先駆をなすものであった。

1937(昭和12)：「九州日報」7月6日～16日に山笠関係記事写真はあるが標題の記載はない。「釜屋町四番山笠」の写真(7月8日)から「太閤記」の標題を読み取ることができる。

福岡市はこの年から山笠につき一ヶ町に五百円、六当番町に合計三千円の援助をはじめ1944年まで続いた。博多商工会議所も福岡市の半額の援助を始めた。

同時期にシリーズ連載記事「夏祭りお国色わけ」が福岡県各地の祭りの記事を載せているので、県内各地の祭の由来を知る参考になる。

武田信次郎は山笠を優れた「協力主義」、「団体運動」の性格をもつ「民族行事」であり、非常時における意義

は大きいという(「山笠の現代性」1937年7月20日「九州日報」)。ここには、山笠がもつ上位下達の組織性に注目し、本格的日中戦争に突入していった当時の日本社会の参考にせんとする意図が窺われる。

1938(昭和13)：一番(蔵本町)「天慶武人鑑」、「武威輝異国」。二番(中石堂町)「皇德輝宇内」、「神風*国難」。三番(下西町)「妖誅大慶勲」、「皇威宣揚誉」。四番(大乘寺)「仇討孝子鑑」、「勇婦奮闘之誉」。五番(万行寺)「皇軍将士之誉」。六番(下呉服町)「菊水流芳誉」、「国姓爺合戦」(以上、7月12日)。

この年日独伊防共協定が締結され、それを祝うイタリア使節パウルリッチが来福、歓迎する山笠が曳かれた。この年は日本の中国への侵略戦争が本格化したのが、神功皇后の三韓征伐、豊臣秀吉の朝鮮征伐の標題が数多く飾られている。これはこれらの標題が侵略戦争下の戦意昂揚と結びついて採択されたことを示している。

1939(昭和14)：「九州日報」には山笠写真あるも標題記載なし(7月11～15日)。

1940(昭和15)：五番山笠(下新川端町)「神光照八絃」。六番山(下小山町)「出雲発神瑞」(写真より読み取り、7月10日)。「誠忠却非望」(7月11日の写真から読み取れたが、番数は不明)、「皇威輝*八絃」(7月16日、番数不明)。

元福岡市会議員で山笠への福岡市補助金獲得に尽力した若竹敬次郎は、追い山笠には「博多っ子のファッション気分」があると座談会で語っている(「博多山笠興隆座談会」、「九州日報」1940年7月21日)。この発言は、昇き山を100人位の男衆がかついで声をあげながら勢いよく走る追い山について、それがもつ統制のとれた団体行動に感じ入り、当時国内で進行していた国家の統制に重ね合わせてのものであろう。この統制のとれた行動は祭の主体が尊重する規範でもある。

1941(昭和16)：山笠の写真掲載、標題記載ともになし。

1942(昭和17)：山笠写真あり、標題記載なし。写真から読み取れる標題は「荒鷲無敵誉」(四番山笠、片土居町の昇き山)(以上、「九州日報」7月11日)。7月16日に写真あるも標題は判読不能。この年三本の飾り山があった、との記事あり。

7月11日のつぎの記事がある。

「最後に一つ忘れてならぬことは博多の山笠は生まれながらの“海の子”海津見族の子孫である博多っ子の民族意識を表徴していることで、まづ浄めには海のものである浜の潮井を取りに行く、追山の時に水をかけるのも禊の意味と海族の子孫を現はすものである」(「九州日報」)。

なお、「九州日報」は1942(昭和17)年8月9日号が最後で、その後「福岡日日新聞」と合併して「西日本新

聞」となる。しかし、1943（昭和18）年7月の飾り山笠の標題は「西日本新聞」に、その記事を読むことができない。

1944（昭和19）；当局と折衝し、山昇きは7月11、12、15日に制限される。9月には西部軍司令部の要請もあり、戦意昂揚のため映画「陸軍」（木下恵介監督、田中絹代ら出演）に出演。その時に山笠取り纏め関係者が山笠昇・廻り道路表に記した依頼文は次のとおりであった。

「日本の皇威を輝し、国民の意気を結集し、国難突破の決意を昂揚せんとする、此の際忠臣菊池一党に縁深き吾等の氏神櫛田神社の祇園山笠も、本年は特に博多っ子の燃ゆるが如き闘志を發揮し、山笠行事を遺憾なく遂行致したく、特に各総代初め役員各位御厚配相煩したく、此段願申上候」（落合栄吉『博多祇園山笠史談』（博多山笠振興会、昭和36年）312頁）。

ここには、山笠の主体が山笠行事をとおして国民の戦意昂揚に一役立ちたいとする意向が示されている。

以上をまとめると以下のようになる。標題が表している徳目は<>で示した。

- (1) 神功皇后の三韓征伐にかかわるもの 39件<国威・武威>
- (2-1) 豊臣秀吉（秀吉家臣の武将も含む）の朝鮮征伐にかかわるもの 37件<国威・武威>
- (2-2) 豊臣秀吉の朝鮮征伐以外での秀吉の武勇・栄華にかかわるもの 13件<武威・知略・栄華>
- (3-1) 加藤清正の朝鮮征伐時の虎退治にかかわるもの 3件<勇氣・武勇>
- (3-2) 加藤清正の朝鮮征伐時以外での武勇にかかわるもの 2件<武勇>
- (4-1) 源義経にかかわるもの（一谷合戦、鴨越などは義経、弁慶などが登場するが、直接のテーマは合戦であるので、ここに取り上げていない）13件<武勇・知略・悲劇の英雄>
- (4-2) 源義経の活躍した合戦にかかわるもの 28件<武勇・知略>
- (5) 牛若丸（鞍馬天狗を含む）にかかわるもの 12件<知略・武勇>
- (6) 武蔵坊弁慶にかかわるもの 11件<忠義・武勇>

1-2. 1-1（1731～1930、1935年の時期において、多く採択された標題）の分析

以上のまとめから、つぎのようなことが指摘できる。

- ① 採択された標題が多い順にそのテーマを並べると、1位は（1）の神功皇后の三韓征伐にかかわるもので39件、2位は（2-1）の豊臣秀吉の朝鮮征伐にかかわるも

ので37件、

3位は（4-2）の源義経の合戦にかかわるもので28件、4位は（4-1）の義経の知略・武勇にかかわるもので13件、

5位は（2-2）の秀吉の武勇にかかわるもので13件、6位は（5）の牛若丸の知略・武勇にかかわるものの12件である。

以上のように、多く採用された標題の上位1位から6位までは、すべて日本の国威発揚や武士の武威發揮に共感、称賛するものである。

② 1位の神功皇后の三韓征伐にしる、2位の秀吉の朝鮮征伐にかかわるものにしる、いずれも日本の国威を朝鮮に示し、侵略に共感し称賛するものであった。そこには武に勝る日本、武に劣る朝鮮という朝鮮観や朝鮮蔑視の心性を明らかにしていると思われる。

③ 国内における「武力」發揮の標題をつけた、豊臣秀吉側（秀吉、その家来、加藤清正）と源義経側（義経、義経の合戦、牛若丸、弁慶）を比較してみよう。

秀吉側は、

（2-2）豊臣秀吉の朝鮮征伐以外での秀吉の武勇・栄華にかかわる標題数 13件

（3-2）加藤清正の朝鮮征伐時以外での武勇にかかわる標題数 2件

以上の合計15件であり、採択された時期は1830年代から1880年代の幕末、明治維新时期に集中している。

義経側は、

（4-1）源義経にかかわる標題数 13件、

（4-2）源義経の活躍した合戦にかかわる標題数 28件、

（5）牛若丸にかかわる標題数 12件、

（6）武蔵坊弁慶にかかわる標題数 11件。

以下の合計64件であり、採択された時期は1620年代から1910年代にわたるが大部分は江戸時代の前中期に集中している。

以上から、同じ国内における武勇發揮の標題でも、日本をめぐる対外政治状況が「平和」な江戸時代の前中期には義経側の武勇の標題が多く採択され、1830年代以降の、異国船の日本近海出没にともなう対外危機状況が発生する時期になると、秀吉側の武勇の標題が多く採択されていることが分かる。また、その採択件数については、義経側の標題数（64件）は秀吉側のそれ（15件）よりも圧倒的に多く、義経側は1830年代以前では、秀吉側よりも大きな共感、称賛の対象になっていることが分かる。

④ 義経側の武勇に関わる標題は、神功皇后三韓征伐や秀吉側の朝鮮征伐にかかわる標題と前記（7）壬午事変・甲申事変から日清戦争以前までの時期の標題を、

見れば分かるように、同時期に採択されていることが分かる。義経側の武勇にかかわる標題は、1889年（明治22）年の「檀溪飛渡将」（壇ノ浦での義経の八艘飛）であり、神功皇后三韓征伐の標題は1885（明治18）年の「聖后招福琴」、秀吉の朝鮮討伐のそれは、1888（明治21）年の「征韓武略績」である。

すなわち標題採択は、内に義経、外に神功皇后、秀吉という組み合わせであり、神功皇后や秀吉の朝鮮侵略への共感称賛は義経の国内での武勇への共感称賛と一体化していたのである。

これはいかなる心性の構造によるのであろうか。つぎのような一つの推測が出来るように思われる。

当時の民衆が抱いていた義経のイメージはつぎのようであったであろう。すなわち、幼くして母と生き別れ、鞍馬山で剣術修行して剣の達人となり、弁慶という無双の忠臣（「弁慶勸進帳」）を得た。義兄頼朝の平氏追悼には知略を振るった武勇を發揮し（「一谷鶴越」）、兄頼朝の天下取りに大きな貢献をした。しかし信頼していた兄の不信をかい（「義経腰越状」）、朝敵として追われる身となり、落ち延びた奥州（「牛若奥州下」）で自ら命を絶った。このような不幸な生まれに屈せず訓練を積んで知略、武勇に優れた武将として大きな功績を挙げながらも、不運な最後を遂げた義経には、悲劇の英雄として同情が寄せられた。いわゆる判官鼻眞（ほうがんひいき）である。ではなぜ判官鼻眞が「神功皇后三韓征伐」や秀吉の「朝鮮征伐」への共感称賛と結び付くのであろうか。

義経びいきの側に立つと、頼朝は権力に相当し、頼朝不信は権力不信、批判となるであろう。権力を明治政府に比定するとき、権力への不信批判は政府への不信批判となるであろう。政府の内外政治にあきたらず、それへの批判は、当時の朝鮮をめぐる清国との対立状況発生という対外危機感の発生のもとで、対外強硬の立場を取らせたのである⁽¹⁾。この対外強硬の立場が「神功皇后三韓征伐」や秀吉の朝鮮征伐にかかわる標題の採択に結び着いたものと思われる。すなわち、権力への不信批判（判官鼻眞を生みだす義経側の武勇）が、権力批判の手段としての対外強硬の主張（「神功皇后三韓征伐」、秀吉の「朝鮮征伐」）に結びつき、政府開戦時の戦争支持に結びつく、という心性の構造である。

この時期の飾り山笠の標題には、神功皇后朝鮮征伐や、豊臣秀吉・その家来の朝鮮征伐にみられるように、朝鮮侵略にかかわるものが数多く採択されていた。

これは当時の山笠祭の主体が日本の朝鮮へ侵出、侵略を支持し、誇りとする心性を保持していたことを推測させる。

⑤ この推測に結びつくと思われる、当時の主体を取り巻く博多福岡の社会的雰囲気として、つぎのような史

実がある。1887（明治20）年2月20日から40日間、博多の崇福寺で福岡博物展覧会が開催された。そこに九州各県の名家から新古書画、古器物、美術品等由緒ある物品が出品展示された。印刷配布された出品目録には「朝鮮分捕」と記された蠟石三体佛、弓、大蠟燭、撞木、朝鮮食籠や甲冑、古剣、木製屏風など八点が含まれており、それら出品人八人のうち、少なくとも五人は福岡博多の人々であった。（『福岡博物展覧会出品目録』（明治20年3月出版）、同日録（明治20年4月出版））。志賀神社は神功皇后三韓征伐の二幅図を出品した（『福岡日日新聞』明治20年4月8日）。このような事実は、出品者、博物展覧会の主催者が「朝鮮分捕品」に抱いていたある種の誇りに近い価値とそれを見物にきたひとびとの共感が社会的雰囲気として存在していたことを示していた、といえるであろう。前出の（7）の壬午事変・甲申事変から日清戦争以前の時期の年次別標題をみても分かるように、この年の前後の時期には、日本の武威を朝鮮に示す飾り山笠が飾られていた。力による朝鮮への優越の社会的心性が存在していたといえよう。

また1908（明治41）年2月には、1895年10月8日の韓国の明成皇后・閔妃惨殺に関わった、と言われる玄洋社の一員が、そのとき使用した日本刀を櫛田神社に奉納している（『櫛田神社収蔵品目録』（福岡市教育委員会、昭和62年）69頁、「朝日新聞」1995年9月12日）。

かれは奉納にあたり、「之れ韓王妃を斬って埋木となったものなり」と記し、惨殺に臨んで詠んだ歌「我が愛でし 太刀こそけふはうれしけれ すめら御国のために尽しつ」を添えていた。また奉納した刀の鞘には「一瞬電光刺老狐」と墨書されていた⁽²⁾。「老狐」とは閔妃のことである。これらの書付、歌、鞘に記された一文からは、犯した行為にたいする反省は読み取れず、逆に刺殺に使った刀への愛着が感じられる。これらの史実は、山笠祭を育んできた地域が明治期に持っていた朝鮮への心性の基調（日本の朝鮮に対する武威・武力行使を容認し、日本強者・朝鮮弱者を信じて疑わない心のありよう）を明らかにしているように思われる。

（未完以下、次号）

（註）

(1) 1884、1885年の甲申事変に際し、「福岡日日新聞」は論説で日本政府に朝鮮、清国への「懲罰」出兵を促し、全国の義勇兵志願運動の展開状況を熱心に報じた。この「福岡日日新聞」の対外強硬論については、拙稿「甲申政変と『福岡日日新聞』『異国と九州』（雄山閣、1992年）を参照されたい。

- (2) 黒龍会編『東亜先覚志士記伝』下巻（原書房、1966年）772頁。

Summary

Most of the themes of the decorations of Hakata Gion Yamakasa festival from the 17th century to 1945 reflected the conquests of Korea by The Empress Jingu and by The Great General Toyotomi Hideyoshi. Historical facts show that the promoters of this festival had an admiration for the conquests of Korea. These promoters' ethos was connected to the political and social atmosphere of the Hakata-Fukuoka district in those days. This paper shows two historical facts that are connected to this atmosphere: (1) items that have been on exhibit in Fukuoka-Hakata museums held on 1887 in Meiji era and (2) swords contributed to the Kushida shrine.

社会的刺激の最適性についての時間生物学的視点[※] —— 女性の情動変動と性周期との関係において

大里 栄子

Optimality of Social Stimuli in the Menstrual Cycle and Fluctuations of Emotional States

Eiko Osato

要 旨

本論は、女性の情動変動と性周期との関連において社会的刺激の最適性について検討することを目的とした。これまで社会的刺激の最適性について、言語刺激あるいは非言語的な表情、課題遂行状況における指導条件、協同や競争といった集団状況の影響、およびそれらの刺激条件の影響を性格や不安に関する個人の特性との関連において検討してきたが、本稿においては長期にわたる縦断面的研究に基づく社会的刺激の最適性についての検討を加えた。とくに長期の時間経過を伴う女性の情動変動と性周期を取り上げた研究、および小集団での討議場面において性周期の規則・不規則を示す女性についての不安、生理反応を比較検討した研究をもとに社会的刺激の最適性を考察した。

Keywords : 社会的刺激の最適性 optimality of social stimuli、月経周期 menstrual cycle、情動変動 fluctuation of emotional state、抑うつ水準 level of depression score、状態不安 state anxiety

はじめに

著者は、これまで社会的刺激の最適性について、言語刺激あるいは非言語的な表情、課題遂行状況における指導条件、協同や競争といった集団状況の影響、およびそれらの刺激条件の影響を性格や不安に関する個人の特性との関連において検討してきた。これらの研究はいずれも横断面的な研究であり、短時間の時間経過を伴う反応については刺激条件との交互作用や個体内変動という観点から検討はしたものの、長期にわたる縦断面的研究に基づく社会的刺激の最適性についての検討は不十分である。本論においては長期の時間経過を伴う女性の情動変動と性周期を取り上げた研究、および実験的に設定した小集団での討議場面において、性周期の規則・不規則を示す女性の情動、とくに状態不安と生理指標として心拍反応を比較検討した研究をもとに社会的刺激の最適性について考察することを目的とした。

1. 女性の情動変動と性周期

小川・大里（1980）は、女性の心身症や神経症を理解するうえで、女性の情動変動を時間生物学的（chronobiological）観点から検討することの重要性を確かめた。本研究においては、性周期と体温および、とくに不安、抑うつ状態との関連、およびその情動の周期性についても検討を加えた。解析の対象となった資料は、年齢19~20歳の健康な未婚女子学生11名のうち、7月~9月に基礎体温測定および所定の調査用紙に1ヶ月以上（ただし月経開始日から次回の月経までの1周期を含む）連続して記録がなされたもの7名である。体温測定は、毎朝覚醒直後、および就寝前に5分間舌下温を経日的に測定した。不安、抑うつ水準の変動は、Spilberger（1972）によるSTAI（State-Trait Anxiety Inventory）により状態不安を、MD調査表（小川、大里 1977）により抑うつ状態を次の6時点にそれぞれ1回計6回測定した。

※ 本研究にあたり、ご教示を賜った小川暢也先生・愛媛大学名誉教授（医学博士）に深謝の意を表します。

- 月経期 Menstrual phase (M)
- 月経終了後 Post-menstruation phase (Post-M)
- 排卵期 Ovulation phase (Ov)
- 排卵後 Post-ovulation phase (Post-ov)
- 月経前期1 Premenstrual phase (Pre-M 1)
- 月経前期2 Late premenstrual phase (Pre-M 2)

Fig. 1a は、以上のような手続きのもとに得られた性周期 26 日型被験者の 2ヶ月間の体温変動であり、低温期と高温期の二相性を示す標準的なものである。他の被験者についても周期は異なるが同様な二相性を示している。このような時系列データの周期性を検討するために、本研究は、Fig. 1b のように観測が等間隔でなくてもよい最小二乗法スペクトルを用いてデータに最も近似する cosine curve を求め、波形分析を行った。これは、

$$\text{cosine curve } y = M + A \cos(\omega t + \phi)$$

を最小二乗法で決定する。この場合、M (= mesor) はカーブにおける最高値と最低値の中間値、A は振幅、基準となる時点を 0 度としたときの頂点位相を acrophase ϕ 、 ωt を角速度として表す。この例は Halberg ら (1974) によって提唱された分散分析法により有意に cosine curve に適合している。また全被験者 7 名の平均周期 31 日についての朝晩の体温変動の波形分析を行った結果においても、有意に cosine curve に適合した。

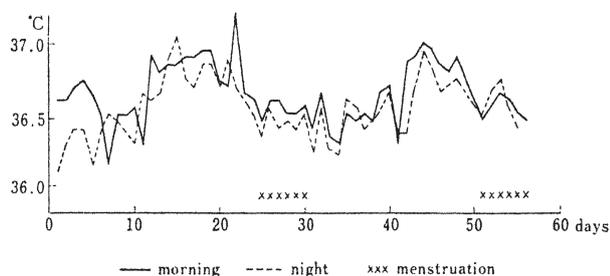


Fig. 1a Changes of a subject's basal body temperature during two menstrual cycles.

(小川・大里 1980 より)

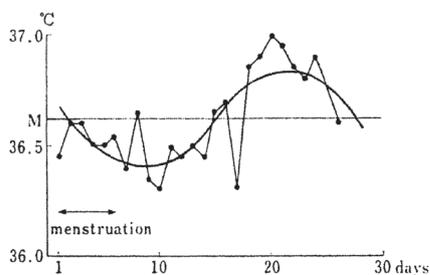


Fig. 1b A subject's rhythm characteristic of basal body temperature during one menstrual cycle obtained by least squares.

(小川・大里 1980 より)

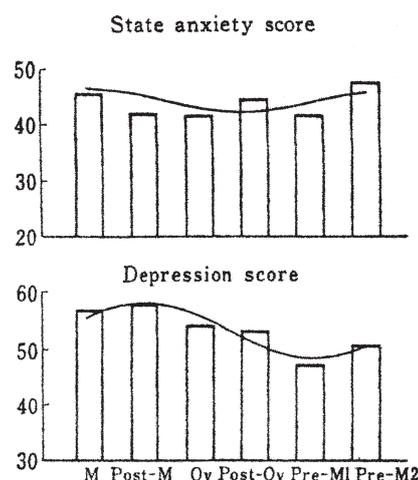


Fig. 2 Changes of state anxiety and depression scores during one menstrual cycle.

(小川・大里 1980 より)

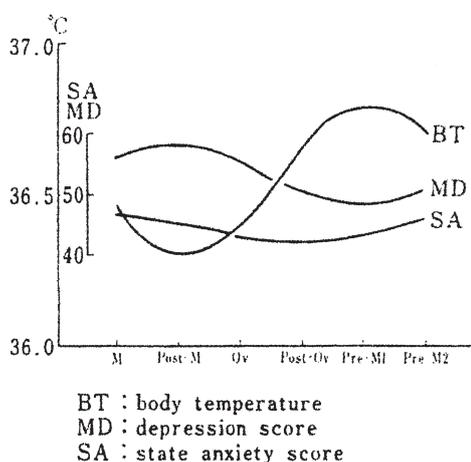


Fig. 3 Rhythm characteristics of basal body temperature, state anxiety, and depression scores during one menstrual cycle.

(小川・大里 1980 より)

一方認知反応としての状態不安および抑うつ水準について検討した結果、Fig. 2 の上図に示すように状態不安は、月経前期において最も高くなるが、個人差が大きく他の時期との間に有意差は認められなかった。下図の抑うつ水準については、月経終了後に最も高く、高温期 (Pre - M1) に最も低く、二相の間に有意差が認められており、最小二乗スペクトルによる波形は、分散分析により有意に cosine curve に適合するものであった。

得られた体温、状態不安、および抑うつ水準についての 3 つの波形は Fig. 3 のように示される。これより体温と抑うつ状態の変動に二相性が認められ、体温の高い時期に抑うつ水準は低く、逆に体温の低い時期に抑うつ水準は高く、両波形は交差する傾向が認められた。

成人女性の基礎体温の変動における低温期と高温期の二相性は一般的に認められ、約 1ヶ月の周期をもつ概月性周期 (circatrigintan rhythm) を示し、本研究におい

でも基礎体温については同様の周期が得られた。また抑うつ状態の変動についても二相性の変動パターンが認められ、体温変動と抑うつ状態との間に密接な関係が推測される。状態不安については体温や抑うつ水準に見られるような二相性の変動は認められなかったが、月経前の抑うつ水準と正の相関 ($r = 0.83$) が認められ、抑うつ水準が高いほど状態不安も高くなると考えられる。この性周期に伴う体温の変動は、女性ホルモン、すなわち卵胞ホルモン (エストロゲン estrogen) と黄体ホルモン (プロゲステロン progesterone) の影響によるものであるが、Benedek と Rubinstein (1939, a, b) は、このホルモンのサイクルと平行して情動サイクルが展開されるとしている。しかしプロゲステロンが急激に消失する月経前期において情動緊張あるいは抑うつ状態が認められるとしているが、われわれの結果と必ずしも一致するものではない。彼らの対象は、経産婦でしかも神経症の患者であり、健康な未婚の女子学生との差異が考えられるが、我々の研究において月経前に抑うつ水準の高さと不安水準との正の相関があったことは、女子学生の場合においても個人差という観点から捉えれば彼らの結果を支持するものである。

社会的刺激の最適性を検討する上で、以上のような女性の性周期とそれに伴う情動変動を考慮することの重要性を示唆するものである。

2. 性周期の規則性と情動との関連—社会的場面における検討

成人女性の性周期は、前述したように通常規則的に二相性のサイクルを展開すると考えられるが、必ずしも規則性が守られるとは限らない。大里・小川 (1994, 1995, 2004) は、社会的場面における心理生理学的反応を性周期との関連において検討しており、その1つとして、Osato と Ogawa (2004) による討議場面における女性の

情動反応を性周期の規則性との関連において検討したものについて考察する。対象は、年齢 19~20 歳の健康な未婚女子学生 100 名であった。チェックリストによる資料より、月経周期の規則的な者 59 名、不規則なもの 41 名にわけ、討議場面における心拍反応および状態不安について分析した。この際の討議場面は、5 名のクラスメイトからなるグループと 5 名の異なるクラスのメンバーからなるノンクラスメイトの 2 条件、およびそれぞれの条件のもとに 2 つの座席条件、すなわち座席の位置を指定した条件 (Fixed) と自由に座る条件 (Free) を組み合わせた 4 条件からなり、それぞれ Classmate / Fixed、Classmate / Free、Nonclassmate / Fixed、Nonclassmate / Free とした。Table 1 に各条件において月経周期の規則的な者と不規則な者とに分けて示した。

Table 1 Subjects classified based on answers about regularity of a menstrual cycle

Seating position	Menstrual Cycle	
	Irregular	Regular
Classmate		
Fixed	14	11
Free	9	16
Nonclassmate		
Fixed	8	17
Free	10	15
Total	41	59

Fig. 4 は、実験経過に伴う心拍反応の変動を示したものである。心拍数は安静時に比べていずれのグループも教示期において増加し、討議場面においてさらに増加したが、月経周期の不規則なグループは Classmate / Fixed および Classmate / Free のいずれの条件においても高い値を示した。一方規則的なグループは、Classmate / Free 条件においては不規則なグループと同様高い反応を示したが、Classmate / Fixed 条件においてはそれよりも低い反応が認められた。また、不規則なグループの

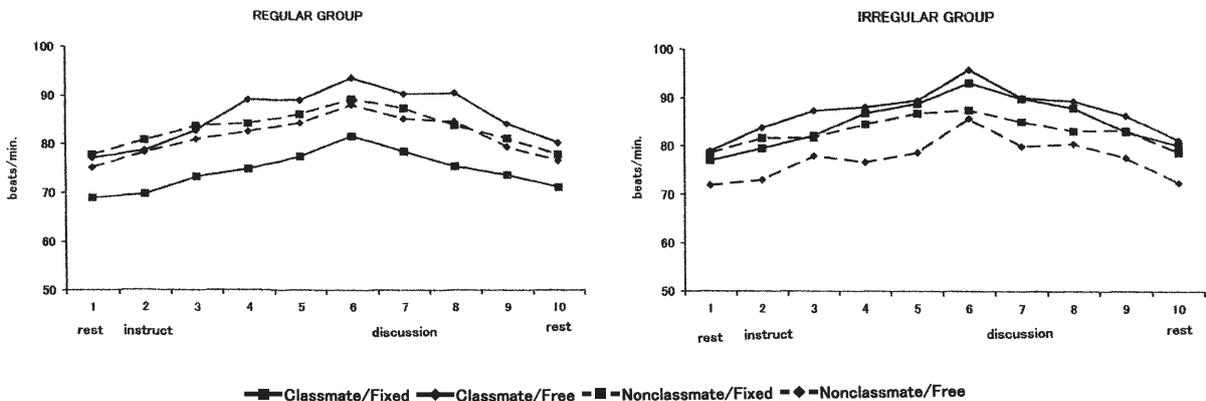


Fig. 4 Changes of heart rates on regular and irregular groups in menstrual cycles.

Nonclassmate / Free 条件の反応は、他群よりも低い反応を示したのに対し、規則的なグループは、Nonclassmate / Fixed および Nonclassmate / Free の両条件とも高い反応が認められた。Table 2 に示すように、分散分析により月経周期の規則性と知り合いの度合い (familiarity, すなわちクラスメイトあるいは非クラスメイト) の交互作用に有意差、および月経周期の規則性と座席の座り方の交互作用に有意差が認められた。

Table 3 は、実験前、教示後、および実験後の 3 時点において STAI による状態不安の得点を示したものである。状態不安についてはいかなる条件においても月経周期の規則・不規則間に差は認められなかったが、Classmate / Free、Nonclassmate / Fixed および Nonclassmate / Free の 3 条件における規則的なグループは実験終了後

状態不安の値が教示期より有意に低下しているのに対して不規則なグループはいずれも有意な低下は認められなかった。本研究は、心拍反応および認知的な状態不安のほかに心理学的時間を指標としてディスカッション時間に対する評価時間を測定しているが、心理学的時間については改めて問題にする。

以上の結果は月経周期の規則、不規則が社会的場面における心拍反応に異なる反応として示され、とくに顔見知りであるクラスメイトとの討議場面において差を示すことは興味ある点である。この顔見知りのグループメンバーの座席を固定した場合と自由に選択した場合における討議場面の心拍反応より、月経周期の規則的な者は状況に応じて反応が変化するのに対して、不規則な者は一貫して何らかの不安緊張が生じている可能性がある。この点については 2 群間に STAI による状態不安得点に差は認められなかったものの実験終了後の状態不安は月経周期の規則的な者が低下したのに対して不規則な者にその低下が認められなかったことが不安緊張の持続としてみることもできるかもしれない。このように女性は社会的場面においても性周期との関連による諸反応が生ずることが考えられる。

Table 2 Analysis of variance for mean heart rates

Source	df	MS	F
Between Subjects			
Menstrual cycle: irregular vs. regular (A)	1	583.585	—
Familiarity: classmate vs. nonclassmate (B)	1	476.810	—
Seating position: Fixed vs. Free (C)	1	837.451	—
A × B	1	6293.740	7.320**
A × C	1	3660.508	4.258*
B × C	1	2429.015	2.825+
A × B × C	1	338.516	—
Error	92	859.772	
Within Subjects			
Parts (D)	9	1688.848	58.697**
A × D	9	43.840	—
B × D	9	31.145	—
C × D	9	9.319	—
A × B × D	9	11.734	—
A × C × D	9	11.462	—
B × C × D	9	29.327	—
A × B × C × D	9	19.045	—
Error	828	28.772	

**p<0.01 *p<0.05 +p<0.10

Table 3 Levels of state anxiety measured state-trait anxiety scale

Parts Seating positions Menstrual cycle	Before the experiment		After the instruction		After the experiment	
	M	SD	M	SD	M	SD
Classmate/Fixed						
Irregular (n=14)	41.2	7.2	41.0	6.9	41.1	8.2
Regular (n=11)	41.5	6.8	42.4	7.3	40.0	8.1
Classmate/Free						
Irregular (n=9)	43.3	8.2	44.4	6.8	42.1	6.1
Regular (n=16)	40.9	9.4	42.8	8.5	34.6	6.3
Nonclassmate/Fixed						
Irregular (n=8)	44.4	8.3	47.6	9.8	43.6	9.0
Regular (n=17)	40.8	9.3	43.4	10.5	39.0	9.6
Nonclassmate/Free						
Irregular (n=10)	41.7	11.8	45.5	14.8	41.7	14.8
Regular (n=15)	44.3	9.7	47.7	10.4	40.7	7.2
Total subjects (N=100)						

3. 社会的刺激の最適性と性周期に伴う情動との関連より

著者は、社会的刺激の最適性について、遂行行動、生理学的反応、および認知反応との関連において実験的研究を行ってきた (大里 1988)。その際社会的刺激として、言語教示、競争と協同条件、座席の配置などを実験的に設定し、それらの効果を知覚運動学習の 1 つである鏡映描写テストや問題解決学習などを用いて遂行行動を観察し、その状況下の心拍反応や血圧といった自律神経反応、および質問紙による認知反応を指標として検討している。また社会的刺激の最適性を予測する理論的モデルとしてヤーキズ=ドットソンの法則 (Yerkes and Dodson, 1908) を適用することを試みてきた。この考え方は最適度の遂行行動を刺激する動因水準は動因の強さの中央範囲に位置し、動因水準と遂行行動との間に逆 U 字型曲線関係を示唆するものである。前報告において大里 (2011) は、この逆 U 字型関係仮説に基づいて指導法の最適性について検討し、逐次選択方式 Play-the-Winner Rule (PWR) 適用に際しての最適性判断の手掛りについて考察したが、このような社会的刺激条件の効果を性周期に伴う情動との関係において考えると、必ずしも同一刺激が一貫した効果を持つとは限らない。従って女性の参加する種々の社会的場面における社会的刺激の最適性にとって性周期の問題は重要な課題の一つである。例えば、

前述した女子学生は月経終了後体温の低下と抑うつ水準の増加傾向が認められたが、この時期に適した対応としてある程度 arousal を高める刺激は必要であるが、叱咤激励は抵抗があるかもしれない。また体温と不安緊張の高まる月経前期においては気持ちの安定する配慮が必要であろう。Benedek と Rubinstein (1939, a, b) は、排卵期において、葛藤緊張の軽減、快適情動状態が認められるとしており、この時期においては活動的な社会的状況に適していると考えられる。しかし AuBuchon と Calhoun (1985) は、月経周期に関する気分や症状の変化について調べることが伝えられたグループ (Menstrual study group) と、とくに月経周期について知らされていない女性と男性を含むグループ (Nonmenstrual study group) の心理的、行動的変数の自己報告を比較し、Menstrual study group は、Nonmenstrual study group に比べて月経前と月経中により多くのネガティブな心身の症状を報告し、また研究の目的を知らされていない女性は男性と類似した気分や症状のパターンを報告している。このように女性の月経期の不快感の報告に社会的期待や他の環境的要因の影響を指摘している。従って男女からなる一般的な社会的状況において女性の正確な心身の状態をとらえることは難しく、この女性特有の性周期に伴う情動変動とその状態に適合した対応の仕方についての検討や環境作りを図ること、また科学的資料にもとづく情報伝達により女性自身の自己認知とコントロールを促すと同時に他者の認識を高めることが要請される。

Payne (1979) は、刺激の源泉である内発的あるいは外来的刺激 (圧力やストレス)、刺激あるいは arousal の程度 (過少、最適、過剰)、および刺激の間隔 (短期、中期、長期) を組み合わせることによって心理的な最適状態を検討し、最適状態は刺激水準が最適で刺激間隔が中間期に起こると仮定している。ここで刺激間隔の中間期を最適とした理由は、モデルの均衡性ばかりでなく、刺激の最適性は、長期になるとむしろストレスフルになり身体に消耗をきたす可能性を孕んでいるからである。この点については、性周期に伴う情動や生理反応の変動を検討する際にも共通した課題であり、刺激、あるいは社会的刺激の影響は性周期に伴う情動変動との関連において検討する必要がある。

また性周期の規則・不規則が討議場面での心拍反応に差異を生じさせるというデータが得られた。これは女性ホルモンの変動の違いから来ると考えられるが、集団内の対人関係や他者の言動が性周期の規則性の違いによって不安緊張に異なる影響を及ぼすことが示唆され、社会的刺激の最適性についての判断は縦断面的および横断面的資料に基づくことが要請される。

また性周期に関しては、集団生活を共にすると同調性

(menstrual synchrony) が認められることも報告されており (McClintock 1971, 大里・小川 1982)、これは類似した食習慣や生活習慣の影響もあるが、必ずしも同じ部屋で生活するグループに同調が起きるとは限らず、対人関係のあり方や心理生理学的要因も影響すると考えられる。さらにこの同調性は、家族内の母親と娘、姉妹の間にも起こり Osato・Ogawa (2003) は、性周期の同調する母と娘と同調のない母と娘の性周期に伴う抑うつ水準の変動について検討しているが、生活を共にする親子間においても同調するケースとしないケースが認められること、また性周期は同調しても必ずしも抑うつ水準は同調せず、心身の発達上の差異、立場の違い、世代間のギャップなど種々の要因が関連していると考えられ、この同調性の問題についても改めて取り上げたい。

以上は性周期との関連における資料であるが、性周期のない未成熟な女性や閉経期にある女性との比較検討も必要である。しかしこの性周期に関する領域を提示することにより、女性の社会的刺激の最適性を検討する上での基本的考え方を提供すると共に性差を考える基礎資料となる。

文 献

- AuBuchon, P. G. and Calhoun, K. S. (1985) Menstrual cycle symptomatology: The role of social expectancy and experimental demand characteristics. *Psychosomatic Medicine*, 47, 1, 35-45.
- Benedek, T. and Rubenstein, B. (1939 a) The correlations between ovarian activity and psychodynamic process: I. The ovulative phase. *Psychosomatic Medicine*, 1, 245.
- Benedek, T. and Rubenstein, B. (1939 b) The correlations between ovarian activity and psychodynamic process: II. The menstrual phase. *Psychosomatic Medicine*, 1, 461.
- Koukkari, W. L., Duke, S. H., Halberg, F. and Lee, J. K. (1974) Circadian rhythmic leaflet movements: Student exercise in chronobiology. *Chronobiologia*, 1, 280.
- McClintock, M. K. (1971) Menstrual synchrony and suppression. *Nature*, 229, 244-245.
- 小川暢也・大里栄子 (1977) うつ状態自己評価表の妥当性に関する研究—正常者の test-retest. *心身医学*, 17, 366.
- 小川暢也・大里栄子 (1980) 女性の情動変動の時間生物学的基礎. *心身医学*, 20, 4, 285-292.

- 大里栄子・小川暢也（1982）性周期の同調性について.
心身医学、22、抄録号、第 23 回心身医学会総会.
- 大里栄子・小川暢也（1994）性周期の社会心理生理学的
研究. 生理心理学と精神生理学 12.
- Osato, E. and Ogawa, N (1995) Women's social behavior
and menstrual cycle on personal space in discussion
situations. *Abstracts of IV European congress of
psychology*.
- Osato, E. and Ogawa, N (2003) Menstrual synchrony
in a pair of mother and daughter: A preliminary
study. *Abstract book in 8th European congress of
psychology*.
- Osato, E. and Ogawa, N (2004) Psychophysiology in
young woman with irregularity of menstrual cycle.
International Journal of Psychology, 36.
- 大里栄子（1988）小集団の社会心理生理学—社会的刺激
の最適性をめぐって. 海鳥社.
- 大里栄子（2011）PWR 方式による課題遂行状況におけ
る最適指導条件選択について—最適性とヤーキズ＝
ドットソンの法則. 福岡国際大学紀要、26, 31–37.
- Payne, R. L. (1979) Stress and cognition in organization.
In Hamilton, V. and Warburton, D.M. (Eds.), *Human
stress and cognition: An information processing approach*.
John Wiley & Sons.
- Spielberger, C. (1972) *Anxiety—Current trends in
theory and research*. Vol.1, New York and London,
Academic Press.
- Yerkes, R. M. & Dodson, J. D. (1908) The relation of
strength of Stimulus to rapidity of habit-formation.
Journal Comparative Neurology and Psychology, 18,
459–482.

Summary

The present study elucidated the optimality of social stimuli for over one menstrual cycle with emotional fluctuations in young women. This study on optimal social stimuli was considered based mainly on two studies. One examined the relationship between menstrual cycle and time course of changes in basal body temperature, state anxiety, and level of depression measured longitudinally. The other examined characteristics of young women with irregular or regular states of menstrual cycle using indices of heart rates, levels of state anxiety, and psychological time in discussion situations that consisted of five members who were either classmates or nonclassmates and were in either a fixed seating position or a freely-selected seating position. The results and implications are discussed for the optimality of social stimuli.

Book 1 の青豆の人物像の再構築に関する一考察 (I)

—— 村上春樹著『1Q84』の頼訳と施訳との対照比較を中心に

海 村 惟 一 海 村 佳 惟[※]

Consideration of the Reconstruction of
the Character of Aomame (Green Soybean) in Book 1 :
A Comparison of Lai's Translation with Shi's Translation of Haruki Murakami's *1Q84* (1)

Yuiji Amamura and Kai Amamura

目 次

序章

第一章 日中両国における『1Q84』の先行研究

第一節 日本における『1Q84』についての先行研究

第二節 中国における『1Q84』の先行研究

第二章 『1Q84』の中の青豆について—Book 1 を中心に—

第一節 原作における青豆の人物像

第二節 日本における青豆の解説

第三節 中国語圏における青豆の解説

注

引用文献

参考文献

〈以上までは 27 号〉

第三章 中国語圏における青豆受容について —Book 1 を中心に—

第一節 Book 1 第 1 章の原文における頼訳と施訳との対照比較研究

第二節 原文の青豆と訳文の青豆との総合検証

1. 原文第一章と頼訳第一章との総合検証

2. 原文第一章と施訳第一章との総合検証

3. 原文第一章と頼訳と施訳との総合考察

終章

注

引用文献

参考文献

附録：日中両国の先行研究

〈以上は 28 号に連載予定〉

要 旨

『1Q84』の原文の中の主人公青豆が翻訳される過程に、翻訳された国の言語環境に合わせ、再構築されたことが明らかになった。頼訳の特徴は、出来るだけ原文のニュアンスを崩さないように原作の人物像を保持することであり、それに対して、施訳は多くの意識を混ぜ、大陸の言語環境にあうように人物像を再構築している。その二つの相異は、主に訳者の思惑により、人物の行動、気持ちが原文より弱められていたり、強められている所にある。本稿は両訳の翻訳テキストの特徴を研究対象にし、翻訳された国の言語環境の背景にある文化が如何にして文学に影響を与えるのかを克明に検討するものである。

Keywords : 『1Q84』、青豆 Aomame、対照比較 contrast comparison、テキスト比較 text comparison、人物再構築 person reconstruction

※ 北京大学博士課程在学

序章

村上春樹は世界中で爆発的な人気を持ち、書かれた小説はベストセラーになり、これまでの村上小説の多くは翻訳され、世界各国特にアジアで熱狂的に支持され、読者にも受け入れられてきた。それに刺激され、作家デビューした者もいる。2010年は『ノルウェイの森』が映画化され、話題をよんだ。そして、最新長編小説『1Q84』Book 1、Book 2が2009年5月に日本で初発売からわずか12日で100万部突破。そして、すぐに韓国語や中国語（繁体字と簡体字）の順に訳され、読まれている。中国語繁体字版（台湾、香港、澳門地区）は1億ニュー台湾ドルを超える売り上げで、中国語簡体字版（大陸地区）でも初版で100万冊というアジア文学史上においても未曾有の社会現象が生まれた。読者に受け入れてもらう工夫として、村上春樹文学の集大成である『1Q84』が翻訳される間に起こる人物像の再構築について研究してみたいと考えている。

1. 研究動機

中国における村上春樹文学の先行研究を調べた結果、それらの先行研究のテーマは、1. 村上春樹の翻訳思想、2. 村上春樹文学の芸術特徴、3. 村上春樹の死生観、4. 村上春樹と内向派文学、5. 村上春樹の孤独意識、6. 村上春樹の文化価値（文化記号論）、7. 村上春樹と存在主義、8. 村上春樹の女性像、9. 村上春樹と暴力性、10. 村上春樹と隠喩文学、11. 村上春樹とポスト現代主義、12. 村上春樹と荘子思想などに及んでいる。以上のデータを踏まえて、『1Q84』の翻訳テキストの対照比較研究を通して、村上春樹文学が翻訳される間に、小説の人物像がどのように再構築されたかに焦点を置きたい所以である。

2. 研究目的と意義

『1Q84』は主人公二人の並行に続く恋愛とともに、宗教の色も濃く、終始善と悪を説いている小説となっている。村上小説としては初めて完全な三人称で書かれており、二人の主人公の物語は交互に奇数章と偶数章に分かれていて、小説全体が楽曲風になっている。今回の宗教の色が濃く出ているこの小説が果たしてアジア、特に中国語圏の読者に販売部数ではなく、本当に質的内容の面でも受け容れてもらえるのだろうか。本研究は、主人公の一人である青豆を中心に、日本語の原文と台湾で出版された訳本と大陸で出版された訳本を照らし合わせ、その人物がどのように訳されたのか、翻訳の基礎単位である文の呼吸（文の間あるいは文の構え、リズムなどを意味する）と文の構造に焦点を当て、きめ細かく分析する

ことによって、その再構築を検証してみたい。それにより、翻訳文学は翻訳された国の文学に影響し得るのかを解明することができれば、本研究の現実的な意義があるのではないかと考えている。

3. 研究方法と位置づけ

本研究は、上述した研究テーマに沿って、三章に分けて検証する。第一章では日中における『1Q84』の先行研究を日本と中国の二節に分け、それぞれの先行研究を調べ、整理、分類、帰納することで、いまの日中における『1Q84』に関する研究現状をまとめる。第二章では『1Q84』の中の青豆について、三節に分け、原作の青豆像に関して、日中でどのように分析、解説されているのかを調べ、整理、分類、帰納することで、いまの日中における『1Q84』の青豆像に関する解説現状をまとめる。最後に、本研究の中心である第三章を二節に分け、本研究の中核の部分である「Book 1 第1章の原文における頼訳と施訳との対照比較研究」を第一節にし、原作の青豆の心理、行動などの表現をいかに中国語に変換（翻訳）したかを一文ないし一呼吸まで細かく分析し検証する。それを踏まえ、第二節で、それぞれの再構築を総合的に文献的に検証する。このテクニカルな研究方法で、『1Q84』の原作の青豆像が中国語圏で如何に再構築されたかを解明したい次第である。

以上の研究方法によって、翻訳文学は翻訳された国の文学に影響し得るのかを解明し、きめ細かい翻訳文学のテキストの比較研究の成果は、自分自身の今後の研究に役立つと同時に、ほかの研究者にも基礎的な研究資料として役立つと考えた次第である。

第一章 日中両国における『1Q84』の先行研究

第一章は「日中両国における『1Q84』の先行研究」にあて、それを二節に分けて考察と分析を行い、『1Q84』の研究現状を明らかにしたい。

第一節 日本における『1Q84』についての先行研究

日本における村上春樹の『1Q84』の先行研究の多くは評論家、作家やメディアの評価、評論、解説である。雑誌での特集や評論が多く、後は、書籍の形で解説本、分析する本なども多い。日本の評論は批判的なものもあるが、概ねは賛成するものが多い。その中の一冊は、アメリカ文学研究者・ロシア文学研究者・作家・文芸評論家・心理学者・フリーライターなど、幅広くそれぞれの立場に立ち、文学的視点・社会学的視点・心理学的視点・宗教学的視点などの視点から『1Q84』についての論説を展開している^①。この現状を一応総括してみたい。

文学的視点から見たものは、「あからさまなエンターテインメント性はなぜ導入されたか」（加藤 2009）、「なぜこういう物語が展開されなければならなかったのか」（川村 2009）、「いまのところ『取扱注意』である」（石原 2009）、「何がではなく、どう書かれているのか？」（鴻巣 2009）、「似ることは、覆すこと」（鈴木 2009）、「私のリトル・ピープル」（永江 2009）、「200Q年の文藝ガーリッシュ」（千野 2009）、「対談 『1Q84』 メッタ斬り！」（大森・豊崎 2009）、「五反田君をマセラティごと海から引っ張りあげて、青豆の前に横付けさせよ！」（栗原 2009）、「陰謀文学者としての村上春樹」（可能 2009）、「秋葉原通り魔事件以後に『1Q84』を読むこと」（円堂 2009）、「小澤「声の物語、物語の声」（小澤 2009）、「『空気さなぎ』とフォースの暗黒面をめぐる考察」（速水 2009）、「世界は骨と皮、血と肉つくられる」（上田 2009）、「『リトル・ピープル』とは何ものか」（清水 2009）、「時間の推移へのささやかな抵抗」（新元 2009）など多彩な論説が繰り広げられていた。

社会学的視点から見たものとしては、「王を殺した後に」（安藤 2009）、「『父』からの離脱の方位」（内田 2009）、「並行世界と小人たち」（平井 2009）、「感傷を超える批評はそこにあるか」（武田 2009）、「はじまりの1984、1968の残りもの」（上野 2009）、「リトル・ピープルよりレワニワを」（佐々木 2009）、「天吾はなぜ青豆を殺したか」（水越 2009）、「『卵と壁』を超えて」（越川 2009）、「村上春樹をめぐる、くたびれた冒険」（竹内 2009）などが挙げられ、それらの解説が読み幅を広げている。

宗教学的視点から見たものは、「これは『卵』側の小説なのか」（島田 2009）、「相対化される善悪」（森 2009）、「生への侮蔑、『死の物語』の反復」（佐々木 2009）、「ディスレクシアの巫女はギリヤーク人の夢を見るのか」（斎藤 2009）などであり、色々な示唆を提示している。

音楽的視点から見たものには「『1Q84』、聴くことの寓話」（小沼 2009）があり、心理学的視点から見たものには「十歳をいきるといふこと」（岩宮 2009）があり、建築的視点から見たものには「ねじれた都市と歴史の物語」（五十嵐 2009）があり、注釈的視点から見たものには「オーウェル、チェーホフ、ヤナーチェク」（沼野 2009）などがあり、その視点が多岐にわたって論じられている。

調べた結果からみると、その他の論文や評論などは2009年には29編、2010年には17編、書物に関しては2009年には9種、2010年には12種、それらは大まかに文学的視点、翻訳的視点、物語的視点、社会的視点、経済的視点、音楽的視点、評論的視点、比較的視点に分かれている。その他に講演や座談のまとめ、編集者の立場からのものもあった。主に、物語のテーマ、モデル、中

心思想についてのものが多かった。人物的な分析は少なかったのである。それも私の研究テーマを選定する時の大きな要因の一つである。

第二節 中国における『1Q84』の先行研究

中国における『1Q84』の先行研究を調べたところ、ネットでの評論が多く、2009年には28編、2010年には118編、2011年3月現在までは14編。その中で最も多い内容は各メディアが『1Q84』の日本版や中国版が発売された時の様子、その売れ行き、翻訳者が変わったこと、翻訳者への評論、ネットでの個人感想などに留まっている。雑誌に掲載していたものは2009年には1編、2010年には15編。これらをみると、

回望：从一九八五年的村上春树到《1Q84》（默二 2009）；日本现代社会伦理的文学阐释——《1Q84》小说人物形象论（尚一鸥 2010）；之于村上春树的物语：从《地下世界》到《1Q84》（林少华 2010）；村上春树新作《1Q84》中文简体字版5月推出（岳卫华 2010）；纯文学的迷途——村上春树《1Q84》中文版案例评述（沈利娜 2010）；村上春树《1Q84》中文简体字版蓄势待发（佚名 2010）；纯文学《1Q84》抢占日本畅销书榜首（甄西 2010 甄西 2010）；存在状态的勘探者——论村上春树新作《1Q84》的主题思想（张奚瑜 2010）；《1Q84》：当代“罗生门”及其意义（林少华 2010）；《1Q84》，打开平行世界的大门（余亮 2010）；从《1984》到《1Q84》（徐迅雷 2010）；村上春树的暧昧——《1Q84》袭来（林妙聃 2010）；从《1984》到《1Q84》（徐迅雷 2010）；《1Q84》中的非后现代因素——兼及村上春树的“新的现实主义”（王新新 2010）；解读《1Q84》的奇妙世界（杨炳菁 2010）；“父亲”的空位（清水良典著・秦岚译 2010）

などがあり、そのタイトルを見れば、『1Q84』の概要、テーマ、芸術特徴など翻訳者、評論家の評論が多かった。それらの評価はやはり概ね賛成のものが多く、2年ぶりに村上春樹が出した長編小説への読者の期待が込められていることが見られる。内容もスリルがあって、2冊目の翻訳本を期待する声も高い。一方では、暴力や性の描写が多く、青少年に悪い影響を与えるのではないかと心配するものも多いのである。

そのインターネットを通して読者に多大な影響を与えたものをいくつかを抜き出してみたいと思う。

不过小说还是从男女主角，天吾和青豆的眼光和感受来描写的。正好这两个人对物质欲望都低，喜欢简朴生活，因此在他其他作品中常出现的外来语物质符号大量减少了。……最大的快乐是把他的特殊文体转换成中文还能保持那特殊文体的感觉。……最困难的

是他的外来语范围很广，从音乐曲名，电影片名，人名到商品品牌，烟酒食物名称，有时查很多数据都查不到。现在有网络方便多了。（田志凌・赖明珠 2009. 11. 24）

これは、台湾版訳者の頼明珠が翻訳時の痛感（『1Q84』の特徴）をインタビューを通して中国語圏の読者に伝え、大きな影響を与えた一節である。そして、林少華も次のように言っている。

如《朝日新闻》称赞这部作品是“集迄今代表作要素之大成的长篇”，是“追究奥威尔《一九八四》式思想管制的恐怖和本源恶的现实批判小说”。小说主题在于对善恶定义及其界线的重新审视和表述，“从中可以看出（作者）对于围绕善恶的一义性价值观彻底抵抗的姿态”，探讨“善恶界线崩毁后世界上的幸福的绝对性”。……作为《1Q84》整体气氛，对邪教世界产生了一定的‘共感’（林少华・田泳 2010）^②。

以上が、これまでの大陸の村上文学の定番訳者である林少華が日本のメディアの考え方を引用しながら、『1Q84』のテーマを解説したもので、これも中国語圏の読者に大きな影響を与えた。

理由之一是，《1Q84》成功地将恋爱小说、思想小说、情爱小说、悬疑小说等种种要素融为一体，铸成了一部所谓综合小说——我觉得这也是理解所谓“综合小说”的一个角度。总而言之，村上将一个深刻、硬派的主题不露圭角地融汇在一部可读性甚强的小说里，赋予了自己的思索以万人皆可接受的，可读性极强的文章形态，纵然不说是创举，也是集他此前全部创作之大成。不同层次的读者可以从中学出不尽相同的多层意义来，完成自己喜欢的理解行为——这也许就是村上广获好评的原因亦未可知。理由之二是，《1Q84》无疑巧妙融合了“私文学”与“公文学”的“综合小说”。（施小炜 2010. 6. 24）

新しい大陸の訳者施は『1Q84』が世界中に受け入れた理由を上述ように二つにまとめたのである。

先行研究の中でも、特に青豆という人物に言及しているものは、次の章で取り扱う。

第二章 『1Q84』の中の青豆について—Book1を中心に—

この章では小説中の人物、青豆を抜き出し、先行研究での彼女についての評価や分析を取り出し、分類すると同時に、第三章での比較の準備をする。

第一節 原作における青豆の人物像

青豆とは小説の中でいったいどんな人物なのか。両親ともが「証人会」という宗教団体の信者なので、食事の

前に大きな声でお祈りを唱えることで、学校で嫌がられ、子供の時はまったく友達がいなかった。転校先で出会った川奈天吾とときめきを感じ、その後、20年間ずっと彼に恋心を抱いていた。小学校5年に家を出て、親戚の世話になり、高校で大塚環に出会い、親友になる。が、大塚環は結婚後自殺することになる。青豆は環を死に追いやった男を殺した。大学卒業後、スポーツジムでインストラクターとして働き、そこで柳屋敷の老婦人と知り合う。彼女のためにマッサージを施すとともに、そのセーフハウスにかくまわれた性的暴力を受けた女性のために、殺しに手を染めることになる。

第二節 日本における青豆の解説

村上のこれまでの小説では女の子、女性はあくまでも脇役で、主人公の男性を手伝う存在であり、重要なヒントを与える存在ではなかったが、この『1Q84』では、女性が主人公の一人となり、そして、物語の重要な人物となっている。

彼女は、冒頭で注目を浴び、高速道路で非常階段を使い、颯爽と降りていく。そして、彼女の使命であることをやり遂げていくのだ。もうひとつ、彼女が高速道路の非常階段を下りることで、時空は捻じ曲がり、1984年から1Q84へとかえる重要な役割を果たした。丹念に鍛えられた体、スポーツジムで働く反面、暴力を振りかざす男性を次々と消していく、殺し屋でもある。彼女には普通の人間には見えない世界を独自の眼力で射抜く力が読者の人気を集め、孤独で規則ある生活と思わぬ一面が読者の心をつかんだのではないかと思う。鈴村氏は主人公をこのように評価している。「青豆に都市の孤独が深く刻まれ、ここで彼女は村上の創造した至高のヒロインになる」（鈴村 2010：164）^③。また、福田氏は次のようにみている。「彼女の言葉に対して『リーダー』は、『あなたのそういうあり方自体が、言うなれば宗教そのものだからだ』と語る。だが、ある個人、肉体を持ち、その手に触れることもあった個人に対する思いが、『宗教』になるとはどんな事態なのだろう。少なくともここで了解出来ることは、そのような『信仰』を抱いているであろうと読者が信じざるを得ないほどに、青豆が鋭角かつ強力な姿に造形されているという事である。その、何よりも拒否として燦めく刃が、強盗の凶器のように読者につきつけられ、この、どちらかと云うと呪いに似たものを『恋愛』だと信じこまされる」（福田 2009：206）^④。福田氏と同じような見方をしている苅部氏は青豆の鋭い感覚を「天吾も青豆も、子供のときの深いトラウマを抱えて生きているが、青豆のほうがつねに世界認識が明確である。月が二つになったのを見て、世界が変わったという意識を持つのが早いし、警官の拳銃や制服が変わっ

ていることに、敏感に反応している。また、1981年に過激派と警察が銃撃戦をして、警官三人が死んだというニュースを聞いたとき、青豆はそんな事件が起きたはずはないと思って当時の新聞を調べる……その原因は、青豆のかつての『証人会』の信仰にあるのだろう。その特異なキリスト教信仰の、強烈な終末論が影響を残して、世界にははっきりとした始まりと終わりがある、という意識をしっかりとっているせいだと思う。そのための、自分をとりまく世界の像と、自分自身のこれまでの人生の記憶とが、きちんと対応しながら鮮明な形をもっている」(苜部 2009: 150)^⑤というふうに分析している。

他には前田氏は青豆のプロ意識を「(株)ワイキューブの安田佳生社長は、……『登場人物たちのストイックな生きざまに共感する』とこれまでの感想を語ってくれた。……たとえば青豆には、『肉体こそが人間にとっての神殿であり、それは少しでも強靱で美しくなければならない』という信念があり、丹念に身体を鍛え、維持している。その身体機能の高さを活かした暗殺者という役割にも、高いプロ意識をもっている」(前田 2009: 90)^⑥という評価をした。

島田氏は「村上が描く作品の登場人物は、皆、社会のなかに確固とした居場所を見出せていない。その不安定さを巧みに描いたからこそ、彼の作品は世界の読者に受け入れられた。しかし同時に、登場人物たちは、居場所のなさに不安を抱いている。その不安も、読者に共有されている」(島田 2009: 371)^⑦と指摘した。今の時代に生きる人々は誰もが孤独で、一人で世間と戦っている。こんなときに現れた勇気のある女性を通し、現実とちょっとかけ離れた仮想の世界に自分と重ねることで現実の世界とのバランスをとり、暮らしていく。冒険がしたいが、出来ない。小説の主人公に重ね合わせ、違った人生のヒロインを演じることができる。

そして、ピュアラブである。青豆は幼い頃にあった天吾に恋心を抱き続ける。彼を求めながらも生理的欲求をきちんと果たしていく主人公。加藤氏は「『1Q84』では、善と悪の同時存在性ともいべきものがかなり極限まで追求されている。……『1Q84』がただ一度、心を通わせあった少年少女が互いを探しあう(そして互いにたどり着けない)話である」(加藤 2009: 148)^⑧とみている。

第三節 中国語圏における青豆の解説

大陸では青豆に対する評価はまだ少なく、そのほとんどが小説の中の人物像、物語に対する評価である。黄鶯は「归根结底是写一个纯洁的故事，一对少男少女在10岁的时候，彼此间产生了某种情愫，在20年中两人始终不曾忘记对方，最后经过种种曲折走到一起。应该，这说是一个纯洁的故事」(《杭州日报》2010.6.17)^⑨と、あくま

でも純潔な物語であると評価している。

そして、作家の毛丹青は「故事的背景是1984年的东京，通过名叫“青豆”的女杀手和叫“天吾”的作家两人的思想和经历，尝试探讨了宗教狂热、暴力、亲属关系和爱等社会和感情关系。……不过小说里的女主角依然是个怪女人。小说简单说就是美女杀人魔和男作家的故事」(《东方早报》2009.6.2)^⑩と、青豆をあくまでも「美女殺人魔」であると述べている。

『1Q84』の訳者施小炜は「青豆基本上是个独行侠，起初还在一家食品公司供职，置身于组织，社会之中，后来主动辞职，在高级健身俱乐部里做签约教练，大抵可说是自由职业者。……二者都主动切断了与组织，社会的联系，力图维持独立的“个”的立场。倘如就这么敷衍下去的话，《1Q84》无疑就将又为私文学谱系增添一抹亮色一道光环了。然而，村上却让他俩分别以各自的行为影响了他人，影响了社会，在一定程度上阻止了历史的进程，抑或说改变了历史的流向。这样，作为一部“综合小说”，在《1Q84》中，私文学与公文学成功地对接，村上文学又一次实现了华丽的“变身”」(《中国青年报》2010.6.22)^⑪というように大陸の読者を誘導している。また、謝芳は「美女殺人魔」よりも一定の理解を持って青豆を見て「青豆受命去暗杀教主，但是教主对她的一切都了如指掌。他知道青豆今天做了什么，目的是什么。他甚至让青豆认为，如果不杀死他，只能让他活得更痛苦。只有杀了他，才能救天吾。但杀了他，青豆本人就会处于危险中。所以杀不杀教主，这是交易，也是权衡。施小炜说，“但这绝对不是说村上春树的意图是以暴制暴。村上春树对极端的事物有天生的不信任。当年日本的学生运动闹得最厉害时，他基本上都在谈恋爱，对那些运动的态度也不怎么积极”」(《良友杂志》2010.8.15)^⑫と、施の見解を引用して青豆の教祖暗殺の行為を理解しようとしている。辛泊平は「给自己一个理由，爱或者恨，都可以。美丽的女杀手青豆选择了两者，或者也就是一个。因为爱与恨原本就是一枚硬币的两面。她恨那些虐待女性的浪荡男人，但又对一个少年时代牵手的男孩念念不忘，不管这两者之间有多大的距离，但却都是她于绝望中活下去的理由，哪怕是扭曲地活着。……青豆一直都在告别，告别闺中密友，告别青梅竹马的天吾，告别性爱女友，告别神秘的老妇人，告别自己的过去和今生」(今天论坛 2010.10.15)^⑬と青豆を評価している。『1Q84』に関する論文らしい論文が少ない中で、林少華はその村上翻訳の専門家としての経験を踏まえ、タイトルを「『1Q84』：当代羅生門及びその意義」にし、『外国文学評論』で公刊され、次のように『1Q84』の大筋をまとめている。

身为体育俱乐部教练的女主人公青豆受一位神秘而富有的“老妇人”之命，以极其巧妙的手段先后结束了若干虐妻男士的性命，最后她受命谋杀邪教头目，

由此和邪教发生关联。身为补习学校数学教员的男主角天吾受出版社好友之托，改写17岁女高中生深绘里的小说《空气蛹》，小说因此获奖并成为畅销书。不料深绘里竟是邪教教主的女儿，天吾由此和邪教发生关联。最后，天吾发现小说《空气蛹》中的“空气蛹”实际出现在父亲的病床上，开裂后里面躺着的居然是自己十岁时就开始动心而20年间从未相见的恋人青豆！与此同时，现实中的青豆则因听信教主之言为保全天吾而将手枪管含入口中扣动扳机。小说至此结束。（林 2010）^⑩

と、この『1Q84』の大筋はすでに300回ぐらいたうろくされているから、大陸の読者にかなり影響をしていることが想像できる。

注：

- ① 河出書房新社編集部. 2009. 「村上春樹『1Q84』をどう読むか」[M]. 東京：河出書房新社.
- ② 林少华・田泳. 2010. 「不译《1Q84》是否觉得遗憾」(<http://www.literature.org.cn/Article.aspx?id=52105>, 2010.5.21)
- ③ 鈴村和成. 2010. 「村上春樹の『1Q84』を行くーハイパーシティ東京へ」[J]. 文學界. 64 (2) : 144-167.
- ④ 福田和也. 2009. 「現代人は救われ得るかー村上春樹『1Q84』(後篇)」[J]. 新潮. 106 (9) : 204-210.
- ⑤ 安藤礼二・苅部直・松永美穂 [他]. 2009. 「座談会村上春樹『1Q84』をとことん読む (特集 ムラカミハルキを10倍楽しむ)」[J]. 群像. 64 (8) : 142-159.
- ⑥ 前田はるみ. 2009. 「ビジネスマンのための村上春樹『1Q84』読本」[J]. The21. (9) : 90-92.
- ⑦ 島田裕巳. 2009. 「季刊ブックレビュー 村上春樹『1Q84』」. 小説 tripper. 2009 (秋季) : 369-371.
- ⑧ 加藤典洋. 2009. 「新連載評論 村上春樹の短編を英語で読む (第1回)「井戸」の消滅ー『ねじまき鳥クロニクル』と『1Q84』」[J]. 群像. 64 (9) : 114-149.
- ⑨ 黄莺. 2010. 「杭州日报：解读1Q84 施小炜跟你一起“破案”」(http://book.ce.cn/ssjj/201006/17/t20100617_21521651.shtml, 2010.6.17).
- ⑩ 东方早报. 2009. 〈村上春树新作1Q84 向乔治奥威尔作品致敬〉(<http://book.qq.com/a/20090602/000008.htm>, 2009.6.2).
- ⑪ 施小炜. 2010. 〈中国青年报：把村上春树视为小资之父是一场误会〉(http://book.ifeng.com/culture/1/detail_2010_06/22/1653838_0.shtml, 2010.6.22).
- ⑫ 谢芳. 2010. 〈华媒网编《良友杂志》：从“1Q84”看村上春树〉(http://life.cvic.com/qingdiao/gediao/20100805/190968_2.shtml, 2010.8.5).
- ⑬ 辛泊平. 2010. 〈今天论坛：1Q84：告别的年代读村上春树的《1Q84》〉(<http://www.jintian.net/bb/redirect.php?tid=34127&goto=lastpost>, 2010.10.15).
- ⑭ 林少华. 2010. 〈《1Q84》：当代“罗生门”及其意义〉[J]. 外国文学评论 (2).

引用資料：

- 村上春樹. 2009. 『1Q84』東京：新潮社. 2009. 7. 5. 11刷
 賴明珠譯. 2009. 《1Q84》台灣：時報文化出版. 2009. 11. 23. 3刷
 施小炜译. 2010. 《1Q84》上海：南海出版社. 2010. 5 第1版, 第1次印刷

参考資料：

- [1] 安藤礼二・苅部直・松永美穂 [他]. 2009. 「座談会村上春樹『1Q84』をとことん読む (特集 ムラカミハルキを10倍楽しむ)」[J]. 群像. 64 (8) : 142-159.
- [2] 加藤典洋. 2009. 「新連載評論 村上春樹の短編を英語で読む (第1回)「井戸」の消滅ー『ねじまき鳥クロニクル』と『1Q84』」[J]. 群像. 64 (9) : 114-149.
- [3] 河出書房新社編集部. 2009. 「村上春樹『1Q84』をどう読むか」河出書房新社.
- [4] 島田裕巳. 2009. 「季刊ブックレビュー 村上春樹『1Q84』」. 小説 tripper. 2009 (秋季) : 369-371.
- [5] 鈴村和成. 2010. 「村上春樹の『1Q84』を行くーハイパーシティ東京へ」『文學界』64 (2) : 144-167.
- [6] 福田和也. 2009. 「現代人は救われ得るかー村上春樹『1Q84』(後篇)」『新潮』106 (9) : 204-210
- [7] 前田はるみ. 2009. 「ビジネスマンのための村上春樹『1Q84』読本」『The21』(9) : 90-92.
- [8] 尚一鷗. 2010. 〈日本现代社会伦理的文学阐释——《1Q84》小说人物形象论〉[J]. 日本学刊 (5).
- [9] 林妙聃. 2010. 〈村上春树的暧昧——《1Q84》袭来〉[J]. 世界文化 (9).
- [10] 林少华. 2010. 〈之于村上春树的物语：从《地下世界》到《1Q84》〉[J]. 外国文学 (4).
- [11] 林少华. 2010. 〈《1Q84》：当代“罗生门”及其意义〉[J]. 外国文学评论 (2).
- [12] 默二. 2009. 〈回望：从一九八五年的村上春树到

- 《1Q84》[J]. 书城 (11).
- [13] 清水良典著. 秦岚译. 2010.〈“父亲”的空位〉[J]. 外国文学评论 (2).
- [14] 沈利娜. 2010.〈纯文学的迷途——村上春树《1Q84》中文版案例评述〉[J]. 出版广角 (10).
- [15] 佚名. 2010.〈村上春树《1Q84》中文简体字版蓄势待发〉[J]. 出版参考 (12).
- [16] 王新新. 2010.〈《1Q84》中的非后现代因素——兼及村上春树的“新的现实主义”〉[J]. 东方丛刊 (2).
- [17] 徐迅雷. 2010.〈从《1984》到《1Q84》〉[J]. 记者观察 (上半月) (9).
- [18] 徐迅雷. 2010.〈从《1984》到《1Q84》〉[J]. 观察与思考 (8).
- [19] 杨炳菁. 2010.〈解读《1Q84》的奇妙世界〉[J]. 外国文学动态 (5).
- [20] 余亮. 2010.〈《1Q84》, 打开平行世界的大门〉[J]. 书城 (10).
- [21] 岳卫华. 2010.〈村上春树新作《1Q84》中文简体字版5月推出〉[J]. 出版广角 (5).
- [22] 张奚瑜. 2010.〈存在状态的勘探者——论村上春树新作《1Q84》的主题思想〉[J]. 名作欣赏 (27).
- [23] 甄西. 2010.〈纯文学《1Q84》抢占日本畅销书榜首〉[J]. 出版参考 (10).
- [24] 田志凌·赖明珠. 2009.〈村上春树《1Q84》来了与名著《1984》有何联系〉(<http://www.zgyspp.com/Article/y6/y53/2009/1124/20094.html>, 2009. 11. 24).
- [25] 林少华·田泳. 2010.〈不译《1Q84》是否觉得遗憾〉(<http://www.literature.org.cn/Article.aspx?id=52105>, 2010. 5. 21)

Summary

In the process in which the hero Aomame (Green Soybean) of *1Q84* is translated, the unity with the linguistic environment and the hero having been reconstructed became clear. One feature of Lai's translation is that, as much as possible, it sticks to the original character's image in such a way that the nuance of the text is not broken down. Shi's translation mixed many free translations and reconstructed the character's image so that it corresponds with the continental linguistic environment. These two differences show how the character's actions and feelings can be weakened from the original text, or are mainly strengthened by the translator's supposition. They also show that when examining translated literary works, we should consider how the works are affected by the cultural background and linguistic environment of the translator.

ロバート＝パクストン「さまざまなファシズム」

藤 岡 寛 己 (訳・解題)

Translation of and Notes on Robert Paxton's *Fascismi* (Fascisms)

Hiromi Fujioka

要 旨

その発生から 21 世紀に入った現在に至るまで、ファシズムにかんし、人文科学・社会科学のあらゆる分野から、多種多様な定義づけが試みられてきた。米国の歴史学者 R・パクストンはファシズムを 5 つの局面 (段階) に区分し、ファシズム理解の精密化を図る。具体的には、ファシズム運動の誕生局面 (第 1 局面)、ファシズムが根を張る定着の局面 (第 2 局面)、ファシズムが権力を掌握する局面 (第 3 局面)、ファシズム政権による権力行使の局面 (第 4 局面)、そして長期的な試行の局面 (第 5 局面) である。くわえて、リーダー像の解説や、独伊ファシズムと他地域のファシズム (的) 潮流との比較考察、および権威主義・全体主義といったファシズムと隣接する概念にも言及する。さらに、第 2 次大戦後の「ファシズム」動向とその解釈についても有益な示唆を提供する。

Keywords : ロバート＝パクストン Robert Paxton、ファシズム fascismo、ナチズム nazismo

ファシズムはさまざまな形をとる現象である。各々の歴史的特徴をもつ時代、ファシズム概念自体に解釈すべきなにかの価値があるのかと一部の歴史家が疑ってしまうほど、ファシズム的だと定義しうる多数の政治運動や政府が、——そこには大変な違いがあるにもかかわらず——存在した。

R・デフェリーチェ (Renzo De Felice: 1929-96) は、著作『ファシズムを語る』^{*1} およびムッソリーニ伝最終巻 (1996-97 年)^{*2} のなかで、イタリア＝ファシズムとドイツ＝ナチズムは、種族をめぐる観念 (concezioni razziali) とそれぞれの社会－経済構造の相違により、同一のカテゴリーに属するものではないとした。K・D・ブラッハー (Karl Dietrich Bracher: 1922-)^{*3} をはじめとするドイツの権威ある研究者たちもデフェリーチェと同見解である。

だが、そのように読みとることは、問題をあきらかにしたり、「ファシズム」定義の性質上の濫用を避けるという点では有益であるにせよ、いくつかの重大な影響をもたらす。たとえば、比較研究史的アプローチをやりやすくしたり、20 世紀の歴史のこうした基本的現象を全体的に理解しようという試みを阻害し、またいかなる解釈法的意味もなく明らかにしようという記述的名目論 (nominalismo descrittivo) に至らしめる。

今日、比較分析がとりわけ必要だと感じられるのだが、この比較は同一性を前提とせず、類似点同様、相違点をも探究することをめざしている。ファシズムにかんする多様な歴史表現をじっくりと判断する必要がある。たとえばさまざまなかたちで生じるにせよ、ファシズムは認識可能で分類可能な特徴をもつからである。

変数 (variabili) の第一のまともは運動から体制への歴史的推移の連続的な局面に起因するものであり、第二のまともはファシズムが作用するさまざまな文脈、つまりたまたま行動する時間や場所に起因するものである。ファシズムの現象学が最終的に完成するのは、多様だが相関性のある概念 (つまり、権威主義 autoritarismo、全体主義 totalitarismo、独裁 dittatura) とファシズムとを分かち境界線を突き止めることによってである。

トリアッティ (Palmiro Togliatti: 1893-1964、元イタリア共産党書記長) は、権力についたファシズムと、権力への途上にあるファシズムとのあいだに存在する相違を見逃さなかった。事実、いかなるファシズム体制であれ、その樹立はすくなくともあきらかに特徴的な 5 つの局面を通過する。そのいずれにおいても、異なった性質の歴史的過程が進行しているので、さまざまなかたちの歴史記述の分析がもとめられる。すなわち、第 1 にファシズム運動の誕生局面、第 2 に運動が社会に定着する局

面、第3は権力掌握の局面、第4に権力行使の局面、第5の最終局面は長期的な試行 (prova) の局面である。当然だが、ある局面から他の局面へファシズムを自動的に移行させる歴史的必然性はなにもなく、またファシズム ダイナミカ (dinamica) が一歩も後退せずにもっぱら前進しなければならぬとのいかなる法則もない。

ファシズムの勃興という最初の局面における第1の大きな変数は、正当にファシスト (fascisti) を定義する運動の形成に立ち会う時間と場所に関係してくる。(イスラエル人のスターンヘル Zeev Sternhell のように) 第1次世界大戦前の数年間に純粋にファシズム的な最初の運動の誕生を特定しようと、イタリアや、(スターンヘルやノルテ Ernest Nolte のいう) フランス、およびドイツ、オーストリア=ハンガリーあるいは米国においてさえもみられるが、ファシズムの発生を第1次大戦後にしようと、研究の場は同様に準備されている。ファシズム研究者の大半は、ファシズムの知的・文化的起源を提示しつつ、ファシズム諸運動のいわゆる異端的性格を強調する。自由主義の分野でも社会主義の分野でも同様、かれらはネーションの優位性、頹廢デカダンス に対置される意志強固な行動の魅力、個人の諸権利と法の權威について集団利益 (interesse collettivo) の優越を発見する。

諸々の内閣および現行制度 (それは1914年以前についてもいえる) はネーションのこの状況 (status) と活力と凝集力を取り巻いている危機に立ち向かえないという予感が流布していたけれども、[自由主義や社会主義] 思想のまわりに組織された諸勢力の最初の合流はとりわけ可能であった。第1次大戦とボリシェヴィキ革命は、自由主義者にせよ保守主義者にせよ、当時、ト 中枢部にいた者たちに未曾有の緊急事態を提示した。それは、選挙による審判や市場のダイナミズムによってほどこされる従来の治療法に単純に訴えることでは解決できないようにおもわれた。

この第1局面でやっと出現したばかりのファシズム運動は、19世紀の政治を特徴づけてきた左右二極体制に適應することを拒否し、むしろこのような陣容の分裂を新種の階級協調主義的動員 (mobilitazione interclassista) によって乗り越えようとした。そこでは、左派勢力に加えられた暴力攻撃に、急進的な変化というはっきりしたプログラムが随伴していた。

イタリアの場合、ファシズム運動の当初の要求はとりわけ急進的だった。当初、全ファシズム運動は、国際資本主義はユダヤエリートとしばしば一体であるといった告発もしたが、ムッソリーニも、のちのプリモデリヴェラ (José Antonio Primo de Rivera: 1903-1936) のスペイン=ファランヘ党 (Falange spagnola) やルーマニア民族主義者のレギオン (Legione deo nazionalisti

romeni)⁴¹ 同様、はじめは、財産・資産 (proprietà) や社会的ヒエラルキーを単純に (tout court) はげしくなじた。

1919年時点ではまだ、ムッソリーニはかつての社会党の同僚たちに競争を仕掛けたいかのようにみえた。なおはっきりしないのは、当時ムッソリーニが[社会主義との競合という]この熱望を放棄していたかどうかである。したがってまさに当初は、反資本主義的レトリックと左翼への敵対とが結びつくといったイデオロギイ的立場が原因となり、ファシズム運動の大部分は政治的な活動場所をまったく見いだせなかった。1919年11月の総選挙で、ムッソリーニの名簿はミラーノ選挙区からだされたが、315,165投票者中わずか4,796票しか得票できなかった。ファシズム運動を救うのに一役買ったのはポー川平野の一部活動家で、かれらは、ファシズムを、自分たちの権利が脅かされていると感じていた農村部中枢 (élite agraria) に奉仕するための純然たる突撃集団にいかに変えればいいのかわかってきた。

ファシズム運動は大部分が小規模なセクトにとどまったまま、わずかな数の活動家と血気さかんな反逆的文筆家が出入りするくらいであった。しかし、場合によっては、ファシズム運動は牢固たる社会主義グループのつよい不満を代弁し、政治過程の重要な主体 (attori) に変わり、そうして、ファシズムが根をおろす次なる第2局面の端緒を開いた。

ひとつの運動のはじまりは、通常、文化的・知的な歴史環境のなかで検討される現象、つまり運動そのものに焦点があてられるという現象をつくるが、運動が根を張る局面となるためには、社会環境や潜在的な同盟力や政治的選択に注意点をはっきり移動させることが必要である。ファシズムが地中ふかく根を張ることに成功するのは、現行の政治機構がその正統性を失い、エリート層が自分たちの権力と現状 (status) とを支えてくれる勃興新勢力からの支援を死にものぐるいでもとめるときである。だが、ファシズム運動は権力側の甘言に屈し、ほとんどつねにある変化を受けた。その変化とは、政治の空白部に割り込み、いまや戒厳令下にある保守勢力の要求に応えようとする試みのなかで実現された。

1789年以降、第1次大戦によってはじめて新時代が開かれたといえる。この時期、強大な権力をもつ支配層 (establishment) がその正統性を喪失したのである。大戦の敗北による屈辱と喪失は、地域的な社会主義的革命によって獲得された成功とともに、独・奥・ハンガリーの敗戦国では、ファシズムが飛躍する最初のおおきな機会を得た。この観点からすれば、(たとえ「骨抜きにされた勝利 vittoria mutilata」[損失と疲弊だけの見返りのない戦勝]ではあれ)、イタリアは、ファシズム運動

が大戦後の再組織過程において決定的な政治的重要性を帯びた、公然たる唯一の戦勝国であった。戦後のとりわけ暴力的な社会的混乱や国民の失望にたいし権威をもって対処できないという、イタリアの全般的状況における自由主義政府の失敗が、一部の権力エリートに別の解決策を模索させた。

ポー川平野部の大地主が感じた、状況の統制力を失ってしまうかもしれないという危機感は、イタリア＝ファシズムが脱皮し、政治的空白部分につけいる環境条件を創出した。国境線地域やトリエステにつながる紛争や、エミリア＝ロマーニャやトスカナやプッリャの大地主による同様の闘争に楔のように打ち込むことができたファシズムの方法は、その後にはファシズム国家がイタリア南部の大半で見せたやり方とはかなり異なっていた。

中央－西ヨーロッパ諸国で、ファシズムは1930年代の大恐慌を、根を張る第2の時期であると見きわめた。それ以後では、東欧の共産主義体制の崩壊をみた1989年にはじめてナショナリズム的統合を擁護し、ファシズム的モデルにはっきりとつながる大衆運動が根を張るのに同じく有利な危機がはじまった。しかしながら、これまでのところ、ヒトラーやムッソリーニといった人物を覆った長い悪評や、EUへの参加可能性が多くの国々におよぼした効果的な魅惑により、ネオファシスト運動が政府に接近しようとするいかなる可能性も阻まれてきた。

ファシズム運動は権力を獲得するまでにいたった。これはドイツとイタリアにのみ看取できるファシズム運動過程の第3局面である。ファシズムが根を張るために必要な領域を広げていた危機にたいして旧来の政治手法に訴えることで解決を見いだすのは困難なようだった。したがって、選択肢は社会革命か、国の統合と再生を保証できる反社会主義的機能たる新たな政治的組織体の出現か、に絞られたように思われた。ファシズムはこうした二極状況を極端派（*estremi*）にもたらそうとし、選んで暴力に訴え、また社会動員（*mobilitazione sociale*）や統合、ナショナリズムと反社会主義が大衆の十分な支持を享受しようとする統治的実践（*pratica di governo*）といったものの新しいモデルを提起する目的に並行な諸組織を立ち上げた。ファシストのリーダーはとことん徹底的にやる覚悟だったし、〔征服した〕諸機構で最高の職位をためらいなく要求した。

ヒトラーとムッソリーニが権力に到達したのは、選挙で過半数をとったからでも首都への進軍の結果ゆえでもない。そうではなく、政治家・軍人といったわずかな助言者に促され、通例の立憲的な手続が麻痺し、社会主義者に政権をわたすかそれともファシストのエネルギーと数を利用して左翼にたいする新たな同盟をつくるかの決定に、いずれにせよひとり直面してしまった国家首班の

決断によるのである。

1930年代、ベルギーや英国、フランスのファシズム運動はあるていど周知のものとなる。だが、保守派が選挙で継続して勝利したり、民主主義が国民的に権威ある要素としてなおとどまっている社会－政治的状況では、権力の座から排除されていた。他方、中央ヨーロッパやイベリア半島では、増大するファシズム運動は権威主義独裁（*dittature autoritarie*）に組み込まれた。したがって、ファシズムにとってこうした状況での最大の障害はまさに保守派議員あるいは保守主義専制のつよい生命力（*vitalità*）であったと断言できよう。西ヨーロッパでは、いうまでもなく、社会に生きのびた自由主義的・民主主義的諸価値の残滓がその最大の障害だった。概して、ファシズム運動が反資本主義的急進主義の要素と反左翼プロパガンダとの混合であるという初発の姿に忠実であればあるほど、運動は周縁的な位置に退けられた。

権力の行使という第4局面にかんするかぎり、それはまさしく権力が獲得されたその態様につよく条件づけられているようだ。事実、この点でファシストは、かれらを勝利へと導いたエリートたちを受け入れるかあるいは国家指導部（*dirigenza nazionale*）から排除しなければならなかった。したがって、ファシズムの進化過程において、第4局面は、すくなくとも当初は、万人の認める首領（*capo*）と党と保守的政治指導者と国家官僚組織とのあいだのつよい緊張によって特徴づけられることになる。保守的政治指導者たちと国家官僚組織とは、いわゆる党のこしらえた「並行的構造」（*strutture parallele*）によって直接に威嚇される。しかし、上記の対立的な4者はそれぞれいずれもその他の対立者なしではいられないのである。だからまた、ムッソリーニもヒトラーも、案じることなく立憲制の決定的な体系化を固める。むしろ、二人とも、合理的な打算あるいは純然たる怠惰のためなのか、互いの敵対性によって分断した多くの権力乱用者（*satrapi*）のあいだで（あるいは時として争う既存のさまざまな組織のあいだで）、二人の愛顧を得ようと永遠の闘争を引き起こすがままにするのである。

1970年代の歴史研究において、ナチスドイツで指導者と党と国家と指導階級とのあいだで形成されつつあった緊張をまさに描くために、ブロシャート（*Martin Broszat*）、モムゼン（*Hans Mommsen*）は「多頭制」（*policrazia*〔*polycracy*〕）の概念を展開した。このモデルはイタリアにも同様に適用できるが、両国の違いはイタリアの状況が保守的な権力中枢がともかくも勢力を維持できた点、および、限定的な「正常化」戦略の実行を統帥（*Duce*）^{ドゥーチェ}が選択した点でドイツとは異なる。ドイツでは総統（*Führer*）^{フューラー}は国民（国家・民族）社会主義労働者党〔ナチ党〕のうえに君臨したが、ナチ党の方は

市民社会に浸透し、市民社会を完全には消滅させることなくこれを支配した。それに引きかえ、ムッソリーニはPNF (Partito nazionale fascista、国民ファシズム党) につよい恐怖感を抱くようになり、同党を政治の競技場 (gioco politico) から排除して全権力を国家に集中し、市民社会を平和な状態にもどそうと熟考した。にもかかわらず、^{ドゥーチェ} 統帥はともかくPNFを必要とした。PNFは^{ドゥーチェ} 統帥に国家・王制 (monarchia)・教会から十分な自律性 (autonomia) を保証していた。党活動をたとえ社会的な同意形成に限定するにしても、ムッソリーニは、スペインやポルトガルで生じているような党の活力 (vitalità) を無効にしないように十分用心していた。

第5の局面のファシズムの進展 (dinamica fascista) は時間の継続性と関連するが、歴史的に分類すると、二つの現象を包括しているといえよう。ひとつはファシズム初期の人々の反制度的な熱狂に対する反復的な攻撃 (rinnovato investimento) (だがこれは自滅に流れてしまう危険がある)、あるいは正常化 (normalizzazione) [字義どおりの、不安を除去解消し、社会秩序を復旧・安定させることを意味している] への体系的な活動 (だがこれは^{エントロピー} 拡散 entropia と退廃の危険がある)。とりわけ東部地域の征服が党の「並立的な諸構造」に政治的・精神的圧迫から自由な処女地を提供すると、ナチズム体制は急進化の明白な例を示した。軍事的成功と、ヒトラーに気に入られようと諸組織の間で展開される競争が、概してナチズム急進化の主要な動力とみなされている。

それとは反対に、イタリア=ファシズムの場合は、上記の意味でのムッソリーニの選択ミスと構造的秩序の諸原因のため^{エントロピー} 拡散に向かった。しかしながら、^{ドゥーチェ} 帝国主義的膨張主義、および戦争という至高の試練への^{ドゥーチェ} 統帥の牽引力を示したのは、急進化した諸条件だった。とくに1935~1936年のエチオピア戦争は、新たな動員の高まりにてこ入れしただけでなく、国家の組織活動と並行して行動できる新地平をPNFに提供した。

もし、ファシズムの発展運動全般 (dinamica generale) を記録しようとするような5つの局面があるのであれば、この件にかんする研究が周囲の状況と前後関係ををしばしば非常に無視したことを指摘すべきだ。つまり、多くの研究が、周囲のすべてから孤立したファシズム経験そのものを理解できるという‘まちがった’印象を伝えている。それとは逆に、ファシストたちの運動は、特殊なタイプの危機のために重大な影響をうけた結果である。かれらに向けて開かれた政治空間により、また運動を支援する用意のある同盟者によって、かれらの運動自体がその危機にたいするひとつの解答を示している。第2の局面についてだが、こうした影響はとても異なったかたちで作用したり相互作用したりしうる。たとえば地域的状況は、

第1局面にあつてはほぼまったく影響力をおよぼしていない。事実、第1次大戦後にほとんどすべての先進的な工業系企業でファシズム運動の誕生がみられたが、第2局面では他の可能な選択肢の消滅や、新たな政治空間の利用、さらには同盟勢力の支持がファシズム成功の決定的要因となった。権力獲得の局面である第3局面は、国内政治の手詰まり状況や、保守派支配層 (establishment) がおこなった選択を注意深く分析しなければ、結局は理解できずに終わる。

権力の座についたファシズムの正確な理解は、^{リーダー} 指導者像に過剰に注意を集中させる [ナチズムの] 指導者原理 (Führerprinzip) の残映により無為と化した。しかしながら、ファシズムにかんするもっとも著名な研究は、首領の人格を超えて考察しつつ、ファシズム体制が国家や市民社会に広がってまさに自分たちの同盟者とヘゲモニーを争い闘争が開始されるそのさまざまな態様 (modalità) を探究する。^{リーダー} 指導者像の解釈は当然ファシズム現象を十分に理解するために欠かせないものだが、真摯に理解しようとしぬ研究はどれも東洋的専制君主 (autocrate orientale) 像のような姿を表現することで満足する。むしろ、ファシズムの指導者を、世上のイメージや民衆がかれに託している期待のみならず、党・国家・指導階層・市民社会との動的な相互作用に不可避に巻き込まれた一人の特異な人間としてみる事が重要である。

ファシズムと、これと似て非なる他の運動や体制とを区別するはっきりした境界線を引くとき、ファシズムの特徴がより鮮明に見えるし、ファシズム分析はより深まる。そうした意味で、解明線の1本がファシズムと権威主義 (autoritarismo) とを分かち線である。権威主義研究の第一人者リンツ (Juan Linz) によれば、権威主義とファシズムとを隔てるものは、[前者の] まったく受動的な世論への際だった偏愛であり、また、個々の政党をつうじてではなく、むしろ同業的諸団体 (corporazioni) および、貴族階級や経済諸団体や宗教組織や軍といった伝統的な社会的ヒエラルキーをつうじて実現する統治形態への際立つ偏愛であるという。

ともかく、ファシズムと権威主義とのあいだには一連の浸透作用がはっきりと認められるが、それはなにしろファシストたちが権威主義的勢力の支援によってひとたび権力を掌握すると、「自分たちを舞踏会に連れてきた者と踊る」 (danzare con chi li ha portati al ballo)⁴⁵ ことを余儀なくされたからなのである。他方、1930年代から1940年代にヨーロッパに存在したさまざまな権威主義体制、つまりフランコ (Francisco Franco y Bahamonde: 1892-1975) のスペインやペタン (Henri Philippe Benoni Omer Joseph Pétain: 1856-1951) のフ

ランス、サラザール（António de Oliveira Salazar: 1889-1970）のポルトガル、ホルティ（Vitéz Nagybányai Horthy Miklós, 1868-1957）のハンガリー、アントネスク（Ion Victor Antonescu: 1882-1946）のルーマニアといった権威主義体制は、ファシズムに付属するみかけの象徴（*signi esteriori*）をとりいれているというだけの理由で、あるいは条約や相互扶助協定によって日独伊枢軸と関係をもってしまったがゆえに、ファシストとして分類される傾向にあった。

ファシズムはしばしば全体主義（totalitarismo）とも同一視されている。だが、全体主義は、統治技術だけを考慮するという欠点をもつ概念である。犠牲者の点では、ナチによる大量殺人（*sterminio*）の場所とソヴィエトの強制収容所グラウグ（犠牲者は必ずしもユダヤ人ではなかった）とはかなり異なるようだとことを考えなければ、たしかにスターリン（Joseph Stalin: 1878-1953）やヒトラー（Adolf Hitler: 1889-1945）は、プロパガンダや世論操作や反抗者（*refrattari*）への弾圧といった点で類似の手法に訴えたことは事実だ。

しかしながら、全体主義的アプローチは、ある体制が権力を掌握すると市民社会とのあいだで相互作用をおよぼすという固有の歴史過程をいささかも考慮しない。スターリニズムは革命後の社会状況で作動した。革命誕生時の私人の経済権力と社会的地位（*status*）はすでにだいぶ前に無効とされてしまっていた。そしてこれはファシズム体制とその他の集権勢力（産業支配層 *élites industriali*、貴族階級、軍部、教会権力 *autorità ecclesiastiche*）との相互作用とは全く異なっている。

全体主義カテゴリーにかんする解釈上の不十分さは、ひとつのパラドックスによって立証されるが、これは意味深長である。つまり、この用語はイタリアに起源をもつけれども⁶⁾、全体主義研究者の大半が以下の見解によってファシズムのイタリアそのものを分析から排除しているのだ。すなわち、全体主義的という呼称（*qualifica*）に値すべき厳格で細部に浸透するような支配がイタリア人の日常生活には行使されなかったという見解によってである。

そして事実、ムッソリーニのファシズムはその権力到達時、ナチズムよりも多量の血を流したが、ひとたび体制を築くと、流血はきわめて少なくなった。イタリア＝ファシズムの人種差別主義的（*razzista*）・全体主義的な潜在性の総体を確認するためには植民地事業の実験に注目すべきである。

さらに、ファシズムの定義において、時代と場所に関連するいくつかの境界線を確定することは可能である。ファシズムは凋落した民主主義（*democrazie decadute*）の病のようにみえる。民主政体以前、もしくは市民が大

衆の積極的な政治参加（*attivismo politico di massa*）にふかくかかわった社会の外部に、ファシズムは存在し得ない。その明白な事実、われわれの分析から前産業化時代の独裁を排除しつつ、おおよその時系列的出発点として20世紀初頭の産業化された諸国の自由主義体制をわれわれに差しだすのである。

では〔ファシズムの〕最後の日を決定することができるか？ ファシズムの時代は1945年に終わったのか？ ファシズムが進展するなかでたどった段階自体が、この問いにたいする答えの一助となる。1945年以降、戦前のファシズムと類似した運動はあった。だが、たしかなのは、社会政治的環境と、ファシズムの発生と進化にとって必要な同盟潜在力が決定的に変化したということだ。ヨーロッパ諸国では、1945年以後、その展開の第1局面であると完全に認めることのできるファシズムのぶり返しが起こった。しかし、〔社会が〕破局的な限界までいかなかったことと、第2次大戦後のファシズムへの不信感によって、ファシズムが根をおろすことは阻まれた。

1945年以降に現れたファシズム運動は二つのタイプに収まる。すなわち、過去の遺産か、あるいは新たな創造かである。「継承権をもつ」（*ereditario*）ファシズムの形は当然イタリアとドイツにある。そこでは、経済の減速、失業の戦後初の大きな波、第三世界からの移民、革命的左翼の存在といった種々の同時的要因のため、1960年代末から1970年代初頭にかけてそのピークが確認される。イタリアでは、過去から引き継いだファシズムが、とりわけ南部で、少なくとも2世代にわたり、正真正銘の政治勢力となって現れた。しかし、やがて、政治権力と他の合憲勢力との民主主義的共存への指向が調整的機能（*funzione moderatrice*）を果たした。ファシズムの継承は不可避免地に消滅の運命をたどった。ドイツのネオナチズム（*neonazismo*）も同様に消尽し、東欧から追放された人びと（*espulsi*）の流れもしだいに弱まり、連邦共和国〔旧西独、現ドイツ〕は新しい繁栄の時代を開始した。

ネオファシズム（*neofascismo*）の新しい形は、1980年代、消費社会から疎外され、ヨーロッパ諸都市のますます肥大化する文化的複合から疎外されたもっとも若い世代のあいだで出現した。ネオファシズム〔ネオナチ〕の心象（イメージ）とレトリックはほぼすべてナチズムの遺産（*patrimonio nazista*）から引きだされている。イタリアでさえ、暴力的震撼（*rock violento*）とスキンヘッド（*teste rasate*）という派生現象をともなった。ネオナチはもっぱら若者のあいだで加盟員（*simba, adepti*）をリクルートしたが、たいていが移民に対する人種差別主義的暴力行動に限定されていた。とはいえ、

たとえネオナチズムが「^{メンタリタ}気質と総合的な視野をつうじて」 両大戦間期のファシズムの「奇妙なアナロジー」(singolari analogie)を表現するにせよ、「歴史的文脈における根本的な変化が、この二つの運動を、本質的に分離され隔てられた二つの現象としている」(プロウ, 1994)^{*7}。

戦後の西ヨーロッパは、民主主義が到達した同意と、これまで享受し今も享受している長期にわたる戦争なき平和の時代、また経済的繁栄により、憲法制定権力(potere costituito)を非合法化しようのないかなる危機も知らず、また、1918年から1945年までに記録された危機に匹敵しようのないかなる危機も何一つ知らなかった。スキンヘッドたちが保守派と同盟を見いだす可能性、あるいは他の統治モデルを提起する可能性は実質的にはないのである。

- * (1) 人物の生没年、および〔 〕は訳者による。
- (2) 読みやすさを考え、原典に適宜段落分けを追加した。
- (3) 原典テキストの末尾に付されている参考文献一覧は省略した。

【解題】

ここに訳出したのは、イタリアのエイナウディ社から刊行された2巻本の『ファシズム事典』に収められている項目「さまざまなファシズム」(*Fascismi*)である(Robert Paxton, "Fascismi", in: (a cura di) Victoria de Grazia e Sergio Luzzatto, *Dizionario del fascismo*, volume primo, Torino, Einaudi, 2005, pp. 518-524)。2巻からなるこの事典は総頁数1600ページに迫る大冊であり、近年にイタリアで刊行されたファシズム関連の事典ではもっとも充実したものであるといえる。

訳者は、『新しく学ぶ西洋の歴史—アジアから考える』(南塚信吾他編、ミネルヴァ書房、近刊)で「ファシズムの歴史的諸形態」とタイトルをつけ、「ファシズム」の項目執筆を担当したのだが、訳者の能力と与えられた紙幅から満足のゆく解説ができなかった。したがって、より要諦をおさえ、よりすぐれたファシズムの事典的解説を、しかも従来の説明とは一線を画すような内容を紹介する必要があると考え、このテキストを訳出した次第である。

筆者であるロバート＝パクストン(Robert O. Paxton: 1932-、コロンビア大学名誉教授)は、フランスの対独協力(傀儡)政権であったヴィシー政府およびフランス＝ファシズム、さらにはドゴールにかんする研究^{*8}を重ねてきた米国の政治史・歴史研究者であり、フランス政府はその功績を称え、2009年にレジオンドヌール勲

章を授与している。また、近著として、『20世紀ヨーロッパ史』の第5版がある(初版は1975年)^{*9}。

パクストンは2004年に『ファシズムの解剖学』^{*10}という刺激的なタイトルの学術書を発表し、ファシズム研究に一石を投じた。そして、ここで訳出したテキストは、この『ファシズムの解剖学』の骨格部分をほぼ抽出したものであるといえることができる。同書の特色は以上の拙訳の短いテキストにも十分に活かされている。

パクストンによるファシズム論の特筆すべき点は、ファシズムの展開を5つの局面に細分化し、緻密な分析を展開していることである。すなわち、パクストンはファシズム運動を、創設(誕生)局面(第1局面)、政治システムでの定着(根づき)の局面(第2局面)、権力掌握の局面(第3局面)、権力行使の局面(第4局面)、長期試行(実施)の局面(第5局面)に分類し、上書において各局面を詳述した。これまでファシズム研究においては、「ファシズム—運動」(運動としてのファシズム)と「ファシズム—体制」(体制としてのファシズム)という、R・デフェリーチェによる二分法がつとに知られていた。パクストンの5局面分類と比べてみると、「ファシズム—運動」は第1・第2局面および一部第3局面に、「ファシズム—体制」は第3・第4・第5局面に該当すると推定すれば、パクストンの分類はデフェリーチェのそれをさらに精緻化した考究であるといえるかもしれない。デフェリーチェの論じるファシズムの「運動—体制」二区分を隔てるメルクマールは、「理念・夢—現実・政策」という対蹠関係にある。例示するならば、未完のファシズム(革命)を象徴する事業のひとつであった協同体について、「ファシズム—運動」では協同体主義(corporativismo)という革命的サンディカリズムに淵源をもとめうる理念＝イデオロギーとして構想されたが、現実の「ファシズム—体制」ではファシスト協同体(Corporazione)というほとんど有名無実のたんなる労使協調推進機関もしくは労働者対策機関に終わったことを想起することで、その違いが容易に理解されよう。また、対カトリシズムでは、前者は反教権的姿勢であったし、後者はラテラーノ協定(1929年)にみるように和解を旨とした^{*11}。

ファシズムをこの二分法の視点で見ると、戦闘ファシシというファシズム運動の起源を粗描した拙著^{*12}も、ファシズム理念＝夢の一瞬をかいなでしたものにはすぎない。だが、そこで叙述した原初のファシズム＝イデオロギーの根拠となった構成要素、すなわち第1次世界大戦による心理的閉塞感と被害者意識、既成社会の拒絶、保守主義的自由主義と社会主義という左右の覇権的イデオロギーの拒絶・乗り越え、軍国主義・愛国主義・ナショナリズムは、まさしく「ファシズム—運動」を説明する主要な要素であった。これにくわえ、日本の天皇制国家

主義研究では橋川文三らがしばしば光をあてたある種の情念をイタリアの「ファシズム－運動」にも認めなければならない。それは近代化のなかで失われてゆく共同体への執着（あるいは郷愁）であり、同志的な一体化をめざす団結精神・集合意識であり、それはのちの「ファシズム－体制」期に国家をまとめるために必要な「神話」を形成することになるであろう*13。

パクストンの主張には、従来のファシズム論がイデオロギーによる研究に偏っていたことで、いわゆるデフェリーチェの「ファシズム－運動」（パクストンの5局面区分では第1・第2局、一部第3局面）の部分が極大化されたファシズム論に陥ってしまい、それぞれの局面で姿を変える動態としてのファシズムを把握できなかったことの不備をただそうという意図がうかがえる。つまり、経年的なファシズム像の一貫性に拘泥するのではなく、各局面におけるファシズムを局面ごとの政治－社会－歴史的環境から把握することの重要性をよりつよく打ち出したのだった。付言すれば、たとえば第2局面では第1局面と異なって、地域的影響や非ファシズム系諸組織との同盟関係といった要素が入り込んでくるし、第3局面から第5局面にかけては、「首領（capo）と党と保守的政治指導者と国家官僚組織とのあいだのつよい緊張」および国家（行政府・内閣）を含めた5者の力関係ないしは取引、さらには経済界、また、ファシズムをファシズムたらしめる人民大衆との関係などの諸点をそれぞれの局面で比較考量する研究手法をとることで、真のファシズム理解に接近できると訴えている。

最後に、普遍的あるいは一般的なファシズムの定義について述べておこう。ファシズムとはあくまでイタリアの戦間期における歴史現象であり、ドイツのヒトラーによって導かれた「運動－体制」はナチズムであってファシズムではないという認識が訳者にはつよいのだが、他方、パクストンは『ファシズムの解剖』および上訳テキストにおいて、個別性に配慮しながらも総称としてのファシズム現象、ファシズムの一般化をもとめている。日本ではこれまで、研究歴（研究蓄積）と研究者数の違いにより、ドイツ＝ナチズムがファシズムを代表的に示す現象として理解されてきた。ここ30年ほどはイタリアのファシズム研究者も増え、すくなくとも「ファシズム」はドイツとイタリアでの特殊現象であるとみとめられるようになった*14。なにより、第3局面以上に進展をみせたファシズムは独伊両国しかないのであるから、ドイツ＝ナチズム研究同様、イタリア＝ファシズム研究の深化が期待されるのである。

とはいえ、ドイツとイタリアというわずか2国にあってもファシズムの一般化を規定する、あるいはファシズムを総称的に定義することは困難であるようにおもえる。

テキスト冒頭にあるような、種族観念や社会－経済構造の相違のほか、ドイツ＝ナチズムは党支配であったし、イタリア＝ファシズムではムッソリーニはPNFに手を焼いたこともあり、国家を党に優越させた。前者は民族主義的世界観（反ユダヤ主義や生存圏 Lebensraum）を主張したが、後者は国民国家主義的な膨張主義は当然もっていたものの、民族主義的な観念からの推力は稀薄だったといえる*15。さらに、近代主義・近代化への認識や、権威主義・全体主義などとの近接性・親近性の点でも両者には相当の懸隔がみとめられる。

それでも、ファシズムの一般化は、近代的な大衆民主主義によって形成され成立した階級超越国家（あるいは現代におけるカリスマ支配による大衆国家）が、他者性や多様な文化および諸価値との共存を拒絶し、大衆の支持をえて比類なき抑圧的専横を常態化するつぎなるファシズム的国家予備軍を生起させないために重要な作業である。それは、時々刻々と変化した柔軟なファシズム国家に固有の特質の最小公約数を突き止めることに等しい。ある意味で絶望的な大衆至上主義の現代的グローバリゼーションに向き合い、これに考察をくわえようとするとき、ファシズムという20世紀の歴史的な「基本現象を全体的に理解」するための「比較研究史的アプローチ」は、なにがしかの示唆を与えるであろう。

-
- *1 Renzo De Felice, *Intervista sul fascismo*, (a cura di) Michael Ledeen, Bari, Laterza, 1975: R・デ・フェリーチェ（西川・村上訳）『ファシズムを語る』ミネルヴァ書房、1979年。
 - *2 R. De Felice, *Mussolini l'alleato, II, La guerra civile, 1943-1945*, Torino, Einaudi, 1997.
 - *3 主著としてつぎの著作がある。Karl Dietrich Bracher, *Die Deutsche Diktatur*, Köln / Berlin 1969: カール・ディートリヒ＝ブラッハー（山口・高橋訳）『ドイツの独裁』I・II、岩波書店、2009年。
 - *4 レジオナール（大天使ミカエル軍団）運動のことと思われる。ルーマニアの民族主義については、たとえば次の論文を参照。新免光比呂「社会主義国家ルーマニアにおける民族と宗教」国立民族博物館研究報告、1999年9月。http://ir.minpaku.ac.jp/dspace/bitstream/10502/3187/1/KH_024_1_001-all.pdf（2012年1月、閲覧）
 - *5 〔原注〕 *Il regime fascista. Storia e storiografia*, (a cura di) Angelo Del Boca, Massimo Legnani e Mario G. Rossi, Roma-Bari, Laterza, 1995.
 - *6 アメンドラ（Giovanni Amendola: 1882-1926、自由

- 民主主義者。ファシストの襲撃による負傷により亡命先のカンヌで死亡) やバッソ (Lelio Basso: 1903-1978、ジャーナリスト。民主社会主義政治家。ファシズム期には2度逮捕、投獄される)、ストゥルツォ (Luigi Sturzo: 1871-1959、司祭。イタリア初のカトリック政党人民党の指導者。1924-1945年は米国などに亡命) によって1923年から「全体主義的」(totalitario) の言葉がイタリアではじめて使われはじめたという。cf. エンツォ・トラヴェルソ (柱本元彦訳) 『全体主義』平凡社、2010年、28頁。
- *7 [原注] Diethelm Prowe, "Classic Fascism and the New Radical Right in Western Europe. Comparisons and Contrasts", in: *Contemporary European History*, n. 3, 1994.
- *8 Robert O. Paxton, *Parades and Politics at Vichy*, Princeton, Princeton University Press, 1966; Id., *Vichy France, Old Guard and New Order, 1940-1944*, New York, W. W. Norton & Company 1972; Id., *French Peasant Fascism: Henry Dorgeres' Greenshirts and the Crises of French Agriculture, 1929-1939*, Oxford, Oxford University Press, 1997; Paxton and Michael R. Marrus, *Vichy France and the Jews*, New York, Basic Books, 1981; Paxton and Nicholas Wahl, *De Gaulle and the United States: A Centennial Reappraisal*, Oxford, Berg Pub Ltd, 1994.
- *9 Robert O. Paxton, *Europe in the Twentieth Century*, 5th edition, Belmont, Wadsworth Pub Co, 2011.
- *10 Robert O. Paxton, *The Anatomy of Fascism*, New York, Vintage Books, 2004: ロバート＝パクストン (瀬戸岡紘訳) 『ファシズムの解剖学』桜井書店、2009年。
- *11 このあたりにかんしては、R・デフェリーチェ、前掲書、第三章を参照。
- *12 拙著『原初的ファシズムの誕生－イタリア戦闘ファッシの結成』御茶の水書房、2007年。
- *13 パクストンは『ファシズムの解剖学』(前掲)の最終章「ファシズムとは何か」で、「ファシストの行動を根拠づける思想は、かれらの行動からもっともうまく推論できると考える。なぜなら、かれらの行動には、ファシズムの公的言語では述べられなかったり、暗示的なままにとどめられているものがあるからである」、つまり、思想が行動を規定するのではなく行動が思想を決定すると書いた。それを9項目の「情熱の動員」(mobilizing passions)としてまとめている。すなわち、①圧倒的な危機感、②集団の優越性、③自己の所属集団は犠牲者であるとい
- う信念、④自己集団の衰弱への恐怖、⑤より純粋な共同体のより緊密な統合の必要性、⑥生来の長(natural chiefs)による権威の必要性、⑦指導者本能の優越性、⑧暴力の美と意思の有効性、⑨選ばれた者の他者を支配する権利。Paxton, *The Anatomy of Fascism*, cit., pp. 219-220: 邦訳、前掲、72-73頁: 341-342頁(ただし、訳は同一ではない)。
- *14 戦前の天皇制軍国主義についても日本における天皇制ファシズムという用法もみられるが、ここでは論じない。パクストンは前掲書第7章で言及している(“*Fascism Outside Europe*”)。もちろん、権威主義的・独裁的な運営者にたいする比喩的蔑称としての「ファシスト」使用については、本稿では対象としない。
- *15 すぐれた翻訳であるといえる『ファシズムの解剖学』だが、とくに気になる点は、訳者(瀬戸岡氏)が“national”をすべて「民族の」という形容に統一したことである。氏は、「私は、原語の“national”という単語には、極力ただひとつの日本語『民族』をあてることにしました。このことに関しては、読者のなかには、読み始めのうち違和感を覚える方もあることと思います。しかし、原語でただひとつの単語で表現されている重要な概念が理解できるようになるにつれ、その違和感も徐々に消滅していくものと信じています」(「訳者あとがき」、437-438頁)とことわっておられるが、ドイツは知らず、イタリア近現代史にあって、「イタリア民族」という観念や理念が重要なテーマとして語られたことは寡聞にして知らない。1910年、イタリアナショナリスト協会(Associazione nazionalista italiana、筆者はイタリアナショナリズム協会と訳したい)が発足するが、これを「イタリア民族主義協会」とはふつう訳さない。しいて日本語に訳すなら、同協会発足時の最大のイデオログであるコッラディーニ(Enrico Corradini)の論調から勘案すれば、「イタリア国家主義協会」が適当であろう。さらに、PNFは通常、日本のイタリア史研究者のあいだでは「国民ファシスト党」(この訳文でも表記したが、筆者は「国民ファシズム党」と訳したい)として、「イタリア民族ファシスタ党」(176頁他)とは訳さない。政治学の基本として、“nationalism”の日本語訳は文脈に応じて、「民族主義」「国民主義」「国家主義」と訳し分けねばならないことを学ぶが、やはり、ここでもこのルールを採用する必要があるだろう。もちろん、訳し分けが困難な場合も多々ある。たとえばナチス党“Nazi-sozialistische Deutsche Arbeiterpartei”は「国民社会主義ドイツ労働者党」「国家社会主義…」

とも、あるいは「民族社会主義…」とも訳すことが可能である。もっとも一般的には「国民社会主義…」もしくは「国家社会主義…」と訳され、「民族社会主義」と訳している文献はきわめてすくない。

くわえて、“national”を「民族の」として一対一対応的に訳すとほころびもでてくるのではないだろうか。たとえば、原テキストで“Fascism may be defined as a form of political behavior marked by obsessive preoccupation with community decline, humiliation, or victimhood and by compensatory cults if unity, energy, and purity, in which a mass-based party of committed nationalist militants, working in uneasy but effective collaboration with traditional elites, abandons democratic liberties and pursues with redemptive violence ……” (p. 218、波線引用者)の部分を、瀬戸岡氏はつぎのように訳されている。「ファシズムとは、民族共同体の没落、屈辱、被害者意識といったものに強迫され

たかのように捕われた、あるいはまた、民族の統合、活力、純潔という代替すべきものをもって熱狂することを特徴とする、政治行動の一形態と定義してもよいかもしれない。そこでは、大衆的基盤をもちながら献身的な民族主義者の闘士で組織する政党が、伝統的なエリートと容易ならずとも効果的な協力関係をつくり、民主主義的自由を放棄し、救済は暴力をもっておこない…」(340頁、波線引用者)。ナチズム同様にファシズムも民族に根拠をおいた運動であると見なす先入主があるために、“community”という単なる「共同体」に民族の冠をつけ、“unity”も「民族の統合」と訳して全体的な色調を整えようとしているようである。最後の波線部分も、「熱心なナショナリスト活動家からなる、大衆に基盤をおく政党」と訳すだけで十分だとおもわれる。

* [原注]と明示していないものはすべて訳者による「訳注」である。

Summary

This paper is a translation of Robert Paxton's writing entitled "Fascismi" (Fascisms), compiled in a fascism dictionary published in Italy (its official title: *Dizionario del fascismo*, 2005). Paxton (1932-) taught at Columbia University and his research focuses on French fascism, especially for the Vichy period. The French government commemorated his long-term efforts and gave him the Légion d'honneur in 2009.

The text translated here is possibly a digest version from his book *The Anatomy of Fascism* (2004). His argument is that he examined fascism in a cycle of five stages: (1) the creation of movements; (2) their rooting in the political system; (3) their seizure of power; (4) the exercise of power; and (5) the long durations, during which the fascist regime chooses either radicalization or entropy. No other study has ever been attempted before.

Paxton made it clear by way of the above procedure that fascisms change flexibly their ideas, pattern of actions, relations with their supporters, capitalists, bureaucrats, etc. on a case-by-case basis.

